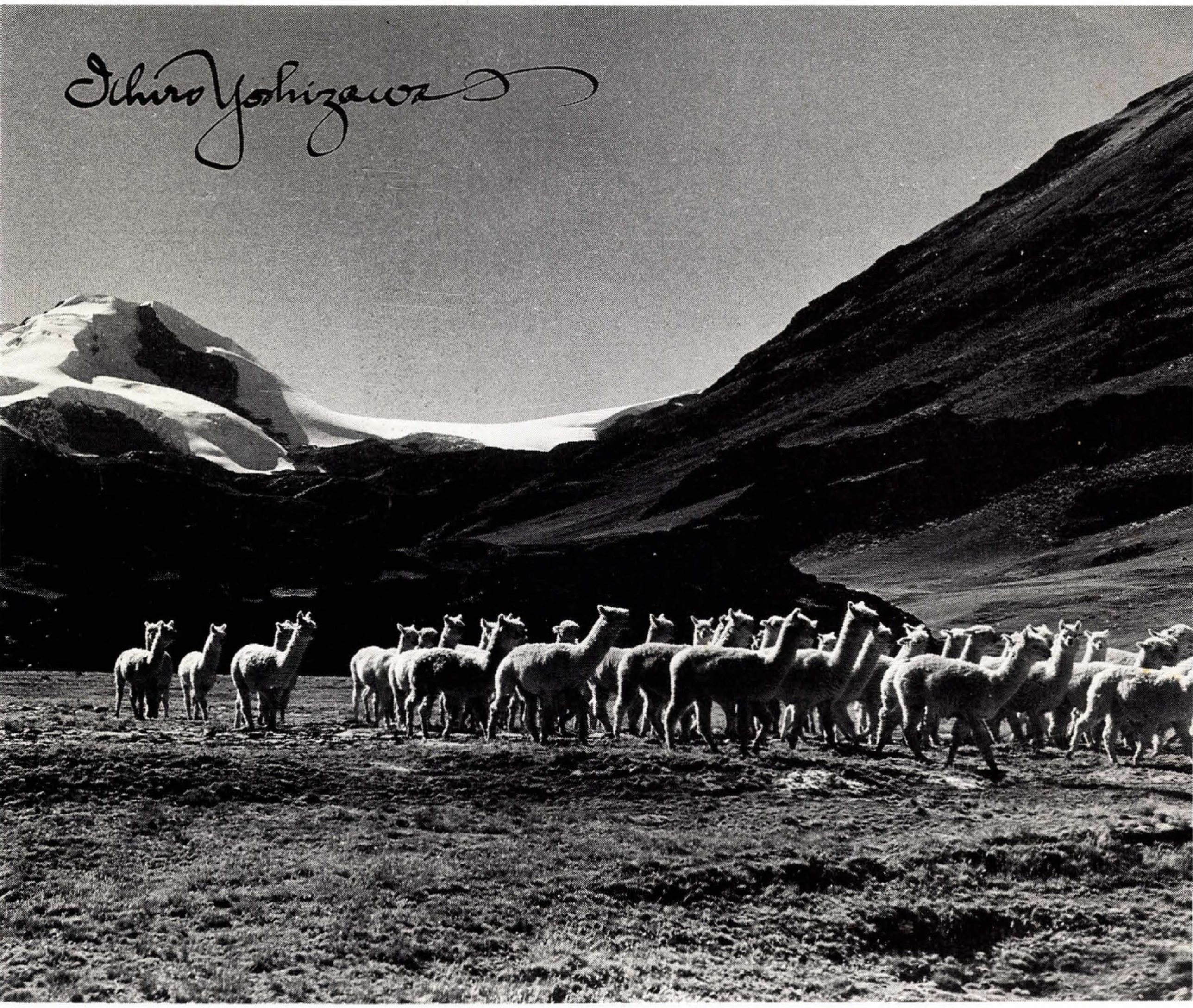
針葉樹会報

1998. 4. 第85号



針葉樹会報　第85号

目　　次

1．吉沢一郎さんに聞く …… 1

2．シルバー・ピーク …… 石原　脩 14

3．ミニヤコンカ初登頂の記録 …… 山本健一郎 15

4．梅里雪山巡礼記 …… 中村　保 17

5．三十六年目の再会 …… 丸山則二 23

6．登り残しの山 …… 渡辺嘉佑 27

7．「ヤロー会」…八方尾根から唐松岳 …… 小林進二 28

8．春の五竜岳 …… 前神直樹 30

9．山小屋に集いて …… 宗像　充 33

会務報告（平成九年総会報告、決算、予算） …… 総務幹事 35

編集後記 …… 37

撮影者　吉沢一郎
撮影場所　ボリビアアンデス
撮影年月　1961年8月
（吉沢一郎さんがご自身で撮影されたお気に入りの一枚です。）

吉沢一郎さんに聞く

吉沢一郎さんが去る一月二十二日急逝された。享年九十四歳だった。葬儀、告別式は、一月二十六日、大坊本行寺で行われ、針葉樹会員も多数列席した。

吉沢さんは、本会のもっとも古い会員だったし、一橋大学山岳部（創立一九二二年）の創立メンバーの一人だった。一橋山岳部、針葉樹会への貢献も多大なものがあり、当会報としても、改めて、会員各位の追悼文を掲載したいと考えている。

しかし、それとは別に、日本山岳会の百年史編集委員会の資料として、中島さんがまとめた「吉沢一郎氏訪問記」があるのを知った。聞き手はすべて当会の会員であり、当会にも関係のある部分もあり、もっとも最近の吉沢さんの考え方や見方が豊富に含まれ、会員各位が興味をもたれるであろうと思われるので、吉沢さん追悼の意を込めて、長文だがあえて、資料として本号に掲載することとした。（稲毛）

訪問年月日：平成八（一九九六）年一月二十七日（土）

聞き手：中村保、丸山則二、倉知敬、中島寛

場所：喫茶店「いとう」（大岡山駅近くの吉沢氏行きつけの店）

一、わが国における近代登山黎明期の頃の思い出

問「吉沢さんは自分の登山の記録をすべて手帳に書き留めておられるそうですが、それは大変なことだし、その手帳も貴重なものですね。」

吉沢「書いてはあるんだが、沢山ある手帳をよく整理していないので、どこに何が書いてあるか自分でもわからなくて困っている。例えば、望月達夫さんによると、「針葉樹」に何年分かの記録が抜けているそうだ。しかし、その当時は自分が編集委員だったし、印刷もすませて自分だけがコピーを持っているはずだが、どこにしまいこんだか未だ探し出せないでいる。」

問「それは針葉樹第一号（大正十四（一九二五）年刊行）以前のことですか？」

吉沢「いや、それ以降のことだ。たしか一号と二号の間だと思う。二十ページ位のもので一冊にまとめてある。これが出てくれれば、望月さんの云う空白の部分を埋めることができる。いずれ必ず探し出して知らせるよ。」

問「吉沢さんの山のご経験とか山に対する考え方は「山へ　わが登高記」という本にまとめられていて、われわれ後輩には大変ありがたい。」

吉沢「これは僕の記録を知ってもらうには、沢山書いた本の中でも一番いいと思う。」

問「この本の最初のところ、「わが悪童時代」、「商大予科へ―山岳部に入る」、「最後の一本杖スキー」といった章は、吉沢さんが育った明治から大正にかけての東京の商家の雰囲気が巧まず描かれていて、大変面白かった。七十六ページに、いかにも吉沢さんらしい表現だが、吉沢さんのお父さんが山に出かける自分の息子を飯田町（注：今の飯田橋駅）に見送りに来てくれた時のことを、次のように書いています。〈土百姓の次男だった俺の息子も、とうとう大学に入って登山をするようになったか、そんな満足感が浮かんでいる顔のように思えた。〉その当時は、山に登る人も非常に少なかったと思いますが、どんな動機で山に登るようになったのですか？そして家庭ではどんな風に見られていたのですか？」

吉沢「うーん、動機と言っても特になかったなぁ。歩くのが好きで、その延長ぐらいに考えたのかも知れない。親父が見送りに来てくれたのは、大正十一（一九二二）年、最初に燕、槍縦走に行った時だったと思う。あの時は、最後に上高地に下りてきて五千尺に泊まり、前穂にも登ったが、その当時、上高地には電気がなく、石油ランプの明かりだけが頼りだった。あれはその翌年の第二回の時だったと思うが、五千尺の二階のランプの下で、中川リーダー（注：孫一人・故人）の叔父さんにあたる慶応山岳部の種さん（注：早川種三氏）の

山の話を皆で緊張して聞いたこともあった。」

問「緊張して聞くというのは、当時は山の知識はあまり持っていなかったのですか？」

吉沢「まだ何も知らなかったねぇ。山歩きはしていたが、それもせいぜい高尾山から笹子付近の山々で、故河田禎氏の「一日、二日の山の旅」（大正十二年刊）と言う本が唯一の頼りだったから。」

問「確か水野祥太郎氏に会ったのがその第二回の燕、槍縦走の時ですね。」

吉沢「そうそう、彼は何故か眼帯をしていてね。「どこの人だ」って聞いたら、「神戸の水野と言います」と返答があった。どういう事情があったか忘れてしまったが、彼はそのまま一緒に槍までついてきた。これが彼との長いつきあいの始まりだが、そんなわけで、日本アルプスは僕の方が水野君より一年先輩になる。」

問「その頃はお金持ちでないと登山は出来なかったのではないですか？」

吉沢「そうかも知れないが、金のことは心配したことがなかったなぁ。親父は俺の云うことはたいていきいてくれたのはありがたかった。別に親父を騙していたわけではないが、何も知らない親父にいろいろな理屈を云っては金をせしめていた。」

問「われわれが大学山岳部に入ると、まず最初に先輩に教えられて、登山靴は高橋で作り、キスリングは片桐で作ってもらったものですが、その頃装備はどうだったのですか？」

吉沢「店の名前は覚えていないが、確か登山靴は神楽坂を上がって行って右に入ったところの店で作ってもらった気がする。」（注：牛込にあった津布久靴店と思われる）

問「鉄鋲を打った靴ですか？」

吉沢「そうだね。とにかく重かったな（注：当時は、厚い靴底の中央にムガーと呼ばれる靴鋲を二列に並べて打ち、周りにクリンカーと呼ばれる鋲を連打した登山靴が一般的だった）。装備はどれも重い物ばかりだった。ザイルもそうだった。」

問「当時、輸入品は入っていなかったのですか？」

吉沢「なかったなぁ。輸入品はとにかく高かったから、持っていたのはせいぜい槙さんぐらいのものだったのではないか。」

問「その頃は北アルプスを縦走するのに明治時代のように草鞋履きということはなかったのですか？」

吉沢「富士山に登った時は草鞋を履いた記憶があるが、北アルプスの時は重い鉄鋲を打った靴だった。」

問「テントはどうでしたか？」

吉沢「いつも持っていったが、やはり重かった。特に雨が降ると水を含んで大変な重さになった。」

問「人夫は連れていったんですよね。」

吉沢「山案内人を雇うのが普通だった。しかし、優秀な山案内人を雇うのは大変で、前の年から予約をしなければならない程だった。それでも、僕らはどこに行くときも、不思議に有名なガイド（伝刀林蔵、志鷹光次郎、黒岩直吉、宮下銀弥等）に恵まれたのは幸いだった。皆で割り勘にすれば、そんなに高くないし、彼らと一緒だととにかく安心感があった。」

問「嘉門次とは一緒だったことはありましたか？」

吉沢「残念ながら僕は嘉門次に会ったことがないんだ。彼が亡くなってから、彼を可愛がっていた槙さんから写真をもらったが、それだけ。」

問「当時の登山人口はどの位だったのですか。例えば、山の中で出会う人は結構多かったですか？」

吉沢「数はよくわからないが、少なかったのは確かだ。あれは大正十五（一九二六）年に三人で東北の野川を遡り、大朝日岳に出て、大鳥池から鶴岡に抜けた時のことだ。新ルート、と言っても、地元の猟師や岩魚釣りにとっては旧知のルートだが、その頃は、いっぱしのベテランになったつもりで冠松次郎さんの真似をして、登山者が誰も入ったことのない谷を遡行することに興味をもっていた。その時も、山の中では誰にも会わなかったが、地元

では、見たことのないピッケルなんかを見て、金鉱捜しの山師か何かと間違えられた。あの時は、薮こぎの途中で、せっかく日本橋の「木屋」で買って持参した新品の蛇を落としてがっかりしたなんてこともあった。」

問「その頃は、登山者と言えば、すべて大学山岳部の人たちだったのですか？」

吉沢「そうだね。社会人山岳会のベテランと言った人たちは未だいなかった。」

問「吉沢さんの本を読むと、当時、大学山岳部の上級生になると、アルピニスト気取りで初登攀を目指したと言った記述がありますが、その時にイメージするアルピニストというのは、やはり槙有恒さんあたりだったのですか？」

吉沢「そうだね。やはり、槙さんがアルプスで最後に残されたアイガーの東山稜を登ったことの影響は大きかった。」

問「槙さんのアイガー東山稜登攀成功は大正十（一九二一）年のことですが、当時はテレビもなかったし、専ら活字のメディアだとは思いますが、その社会的反響はどんなものだったのですか？吉沢さんが大学に入る半年前のことですね。」

吉沢「何と云っても、アルプスで最後まで残っていたルートを登った快挙だからね。新聞でも大きく採り上げられたし、アルプスの存在が世の中で広く知られるようになったのは、やはり槙さんの力が大きかった。自分自身でも、大学に入って登山を始めようと思ったのは槙さんの影響だ。その後、日本山岳会に入会した時も、槙さんの推薦だった。」

問「確か大正十一（一九二二）年に一橋山岳会が発足した時の記念講演会にも、小暮理太郎さんと一緒に槙さんをお招びしていますね。」

吉沢「そんなことがあったかなぁ。誰を招んだか忘れちゃったが、講演会は化学教室という円形の階段教室で、講師が底の方にいて、われわれが周りをぐるっと囲んでやったのを覚えている。」

問「大学の上級生だと、それなりのアルプス登山の姿とかアルプスの山々とか、かなりの知識はあったのですか？」

吉沢「一応その頃から丸善で本を取り寄せて読んだりしてはいた。あまり登山の知識も無かったが、Alpine Journal等も定期的に買って読み、啓発された。これは後の話だが、一九六八年にJAC副会長の立場でUIAA総会に出席した際、ジョン・ハントの奥さんから「あなたは英語が大変上手だが、どこで習ったのか」と言われ、「アルピニズムの源はイギリスだし、山のことを本で読んで勉強するために英語を一生懸命に勉強した」とお世辞を云ったら、とても喜んでくれたことがある。しかし、当時は、手の届く日本の中の山が精一杯で、外国の山に出かけるなんてとんでもないことだと完全に諦めていたね。」

問「吉沢さんの大学時代の登山へののめり込み方というのはどんな程度だったのですか？例えば、山から帰って来ると、もうその日からつぎの登山を計画するといった生活だったのか、それとも、本を読んだり、授業にもある程度は真面目に出るといった生活だったのか。いかがですか？」

吉沢「まあしょっちゅう山に出かけていた。ドイツ語なんかも山のことを勉強するためにけっこうやっていたのだが、試験の時に授業に出ないのにうますぎるというんだな。それで落第しても一年やらされた覚えがある。」

問「われわれの時代だと、一年八十～一〇〇日が普通で、一〇〇日をこすと登山漬けと言う感じでしたが、吉沢さんの場合はどうでしたか？」

吉沢「それ以上だったろうな。よく歩いたものだと、自分であきれてるんだ。」

問「われわれの時代と違って交通機関や道路が発達していなかったから、入下山に随分日数を要したでしょうね。登山と一緒に、旅の要素が多かったことと思います。それにしても凄い。ところで、外とのつき合いはどの位あったのですか？」

吉沢「その頃の事で云うと、一橋のほかの連中

はまるで興味を示さなかったのだが、自分だけは、偉いとか偉くないとかにまるで無頓着で、いろいろな人たちと接触した。ほかの大学山岳部の人達とも気軽につき合って、仲がよかった。一緒に山に登ったこともある。法政大学山岳部の田中菅雄君なんてとてもいい人だったなぁ。」（注：田中氏とは、一九二六年（大正十五年）の五～六月に芦峅寺の光次郎、亀之助とともにスキーで剣岳、立山を登り、黒部渓谷を横断し、針ノ木峠から大町に出ている）

問「その頃、早大山岳部を中心に、社会主義的な風潮の影響の下に尖鋭アルピニズムを唱える動きもあったようですが、その辺の動きはどう見ていたのですか？」

吉沢「藤田信道なんかが中心だったが、思想的なことには全く関心がなかった。もっとも、私の家は芝の桜田本郷町で仕出し屋兼西洋料理屋みたいなものをやっていたから、早大山岳部の連中もしょっちゅう昼飯を食べに来ていた。藤田と言えば、あいつはよく来ていたけれど、いつも金を払わないで有名だった。」

問「その頃、昭和四年十一月に関東学生登山連盟が出来ているのですが、吉沢さんは云いだしっぺだったそうですね。」

吉沢「そうだったかなぁ。」

問「松田さんからそう聞きましたよ。松田さんの話によると、その当時は、山に出かけるにも汽車の切符をとるのが大変で、連盟の力で切符を確保するのが一つの狙いだったとか。われわれも学生時代に大変世話になった学生割引制度は、元はと言えば、昭和の初め、連盟が出来て初めて実現したと伺いました。」

吉沢「何か資料に出ていたか？残念ながら全く覚えていない。」

問「僕らが一橋大学の山岳部に入って、先輩たちから繰り返し吹き込まれたのは、真の登山家を目指すなら、山に登ること、山の本を読むこと、山の記録を書くこと、の三つがすべて出来なければいけない、この三つは三位一体であり、これが一橋山岳部の伝統であると言うことでした。この考え方は吉沢さんが学生時代からあったのですか？」

吉沢「確かにその通りだが、そんな偉そうなことはあまり云った覚えがないなぁ。」

問「偶々手元に吉沢さんが昭和十七年に出版された「北の山・南の山」があるのですが、この本の序にも、〈真の登山者とは、山に登り、山の書を読み、常に山を考えている人の謂いである。実践と研究と思索（反省）の三つが兼ね備えられている人にしてはじめて我々はその人を一個（真の）登山家として尊敬することが出来る〉と書いてありますよ。我々はこれこそ吉沢イズムだと考えています。」

吉沢「くすぐったい感じだね。」

問「吉沢さんは、昭和三（一九二八）年に卒業後、就職して、名古屋、大阪、広島に住み、東京に戻って来るのは昭和九（一九三四）年ですが、昭和十年代の初頭にかけて、けっこうあちこち登っています。それも、あまり知られていない所、特に谷の遡行が多いのが目立ちます。冠松次郎氏は大分意識していたのですか？」

吉沢「学生時代に野川を遡って朝日岳に登ったのが契機になって、ほかの人が登っていない山に興味を持つようになった。その後、東大谷とか団衛谷、伊奈川等川を沢山歩いているが、これは冠さんが書いた本を読んで、沢登りを面白そうだと感じたからだ。冠さんの家にも行ったことがある。その時のことは、確かに何かに書いた覚えがあるが、子供を連れて冠さんの家を訪ねたら、羊羹を出してくれたんだ。もったいないから食べずにいたら、帰りがけに新聞紙に包んで持たせてくれた。」

問「未登の山や谷に出かけようとすれば、地図や本で随分研究されたのでしょうね。」

吉沢「当然そうだな。」

問「帰って記録を書いたら、何に発表するのが普通だったのですか？お互いに初登を競い合っているとすれば、誰もがみるメディアがあったと思うのですが。」

吉沢「まず自分たちの部報「針葉樹」だが、「山岳」もあったし、雑誌も沢山刊行されていた。」

問「「山と渓谷」が発刊されたのが昭和五（一九三〇）年ですが、他には？」

吉沢「昭和六年に発刊された「アルピニズム」（注：後の「登山とスキー」）、「山小屋」、「ケルン」、「ハイキング」等。」

問「その頃は岩登りも盛んになり始めた時代だと思うのですが、吉沢さんは岩登りには興味を持たなかったのですか？」

吉沢「あまり興味なかったんだなぁ。専ら沢だった。誰も入ったことのない、手垢の付いていない所と言うと、結局、沢になってしまう。」

問「沢登りで云うと、冠さんの同年代でちょっと趣が違いますが、田部重治さんもおられます。田部さんの沢登りには関心をもつことはなかったのですか？」

吉沢「あまり重きをおかなかったなぁ。田部さんの本には、確か、小暮さんと一緒に秩父へ行った時だったと思うが、食糧がなくなって歯磨き粉を食べた、なんて書いてあった。こういう変なことは覚えている。」

問「沢登りでも、草鞋でなく登山靴だったのですか？」

吉沢「そうねぇ、あまり草鞋を履いた覚えはない。」

問「ロープはやはり麻だったわけですね。」

吉沢「そう。だから重くてね。」

問「どのくらいの荷物を背負ったんですね。僕らの時だと、普通二十五～三十キロ、四十キロ以上ということもありましたが。」

吉沢「どの位の重さかちょっとわからないが、相当重かったのは事実だ。」

二、山の研究、著書について

問「吉沢さんは、昭和五（一九三〇）年に、最初の本「登高記」を出版されていますね。卒業して二年後、二十七歳の時です。大変若い時の出版だったわけですが、どんな契機があったのですか？」

吉沢「地理学を教えていた田中薫先生が、「吉沢君何か書いてみないか」と云ってくれたのが契機だった。刊行された時にはロンドンに留学中で、わざわざロンドンから序文を送ってくれた。」

問「吉沢さんが日本山岳会に入会したのは大正十四（一九二五）年ですから、二十二歳、本科に進んだばかりの若い時です。入会の動機は何だったのですか？」

吉沢「何と云っても一番立派な山岳会だからね。入れるものなら入りたいと思って槙さんに聞いてみたら、「いやお入りなさいよ」というわけで、自ら推薦者にもなってくれた。先日も日本山岳会の事務局から入会年月日の問い合わせがあったのだが、大正時代に入会した会員は今ではほとんどいないらしいね。」

問「その後、一橋大学山岳部では、卒業後も何らかの形で登山と関わっていこうと言う人が日本山岳会に入会するケースが続きます。僕らもそういう形で、卒業して、アンデスから帰って、日本山岳会に入会したのですが、その当時、一橋大学山岳部では、日本山岳会に入るということは、何か特別な意味があったのですか？」

吉沢「「そんなものは何もあるわけがない。個人個人の好み、考えだけだよ。松木謙三（故人）も古い日本山岳会の会員だったが、彼の場合は、兄貴か親父がやはり会員で、その影響が強かったと思う。松木ばかりでなく、一緒に登った山の仲間には世話になった。松木には特によくしてもらった。アンデスのように長期間の山に行ったときには、「一ちゃん、いない間の家の方の会計はどうなっているんだ」というから、「どうなっているか知らないが、とにかく行くよ」って答えると、彼は何もかも分かった上で面倒を見てくれた。本当に世話になったよ。」

問「記録を拝見すると、夏は沢登り、雪のある時はスキー、というのが吉沢さんの登山の基本的なパターンだと思うのですが、スキーを

始められた契機は何だったのですか？」

吉沢「最初にスキーをやったのは野沢温泉の合宿の時だね。大学に入ってすぐの冬だったから大正十一（一九二二）年のことだ。酒屋という宿屋が本拠だった。酒屋にはその後も引き続いて大変お世話になったのだが、合宿の客を泊めたのはわれわれが最初だったらしい。」

問「吉沢さんの著書によれば、皆自己流で、アールド・ランの〈How to ski〉ぐらいが教科書で、長岡中学出身の松木さんが一番上手だったということですが、野沢温泉の酒屋で合宿するというアイディアも松木さんあたりが仕掛人だったのですか？」

吉沢「その通りだ。最初の年は誰も自分のスキーをもっていなくてね。松木の故郷の長岡の陸軍が貸してくれたのを使った。日本でのスキー事始めは明治四十四（一九一一）年、オーストリアのレルヒ少佐が高田の歩兵五十八連隊に持参のスキーで指導した時に遡るという話は有名だが、われわれが貸してもらった長岡連隊のスキーも高田連隊の払い下げだったかも知れない。靴の下が板になっていて、歩くとガッチャンガッチャン音がした。ストックも最初の年は一本杖で、翌年からは今のような二本杖になったから、もしかすると、われわれが最後の一本杖使用者だったかも知れない。スキーの板に塗るワックスも出だした頃だったが、われわれは面倒くさいので、ロウソクを塗り込んでいた。」

問「その頃輪かんは使わなかったのですか？」

吉沢「輪かんと云うのは、僕らはまず履いたことがなかったね。」

問「シールは使っていたんでしょうね。」

吉沢「勿論使っていた。」

問「技術的にはやはりシュテムボーゲンが中心ですか？」

吉沢「そうだね。僕はあまりスキーが上手ではなかったが、シュテムボーゲンでちゃんと曲がりながら、ゲレンデから酒屋の前まで一気に滑り下りてこられた時はうれしかったね。」

問「記録を見ていると、スキーで初登頂と言う表現が随所に出てくるのですが、歩いて登った人がその前にいたということですか？積雪期に山に登ろうとする人はいたとは思えないから、積雪期初登場と云ってはいけないのですか？」

吉沢「事実はそうかも知れないね。深い雪の中を輪かんで登ったんでは何日かかるか分かったものではない。それでスキーによる登山が考え出された。岩菅山の時も、「山岳」の奥上州号を見てその存在を知ったのだが、未登というので調査は念入りにやった。登ったのは大正十四（一九二五）年の三月だが、前年の暮れからその正月にかけて、野沢のスキー合宿の帰りに渋温泉から上林に回って現地情報を集めた。その時、発哺の関さんから、自分の村の岩菅山を東京の連中に先に登られたんでは顔が立たないから村の若い衆を同行させて欲しいと云う申し出があった。われわれも不安だったから、この申し出では実の所渡りに舟だった。三月の本番の時には村の衆と一緒で道に迷うこともなく大いに助かった。ルートは複雑で、もしわれわれだけだったらお手上げだったかもしれない。」

問「スキー登山の草分けと言うと、今西さん、西堀さん、桑原さん達京大山岳部の活躍振りが目につきます。これらの人たちには皆吉沢さんと同年代だと思いますが、例えば、彼らが北岳を最初にスキーで登ったのは大正十四（一九二五）年です。この年には、船田さん達早稲田大学山岳部の人達も針ノ木岳にスキーで登頂しています。そういった他の大学の山岳部の人達との接点はあったのですか？」

吉沢「僕らはけっこう自分勝手にやっていたから、接点はなかったなぁ。」

問「吉沢さんがマッターホルンに関する研究の成果を初めて「針葉樹」に発表したのは、同誌の第八号ですから昭和十（一九三五）年です。（「マッターホルン災禍」に対する後生の批判」）。そして、「針葉樹」や日本山岳会の「山岳」、「会報」に発表されたものを纏め

て、昭和十七（一九四二）年に出版された二つ目の著書「北の山・南の山」には、「マッターホルンの研究」と題して一括して論考を載せています。同書には、マッターホルン以外にも、アラスカ、アンデス、南方圏（ニューギニヤ、ニュー・ジーランド、南極大陸）の山々の研究が含まれています。吉沢さんがこういう形で外国の山に関心を持ち、集中的に外国の文献を集め、読み、研究するようになったのはいつ頃からだったのですか？」

吉沢「集中してやるようになったのは昭和七～八年以降だが、外国の山の本を買って、読み始めたのは学生時代だった。長年続けているうちに次第に蓄積されていったということではないか。」

問「吉沢さんは卒業後、名古屋、大阪、広島と六年程地方で暮らしが続くのですが、山とのつながり、山と本とのつき合いは途切れることはなかったですか？」

吉沢「そうだね。どこに行っても山を通じて新しい仲間が出来て楽しかった。今、「山と渓谷」に連載している随筆で広島のことを書いているんだが、その関係で、先日、渋谷の大成堂という本屋に地図を買いに行った。その時、つい昔の癖で、うっかり「陸測五万をください」と云ったら、分かる人がいるんだね。おまけに、ポンポン山とか白木山、呉娑娑宇山なんて普通誰も知らない山を五つ挙げて、それが載っている地図を欲しいと言ったら、ピッピッとまるで手品みたいに出て来るんでびっくりしてしまった。」

問「吉沢さんが山の文献渉猟にのめり込むようになったのが学生時代と云うことは、そもそも性格の中にそういう要素があったんですね。」

吉沢「それは確かに云える。性格的に凝り性ではあるが、意地が悪いということかも知れない。」

問「同じように外国の山の文献に興味をもち、のめり込んだ人と言えば、深田久弥さんとか諏訪多栄蔵さんとか何人かおられますが、吉沢さんが一番古いんじゃないですか。」

吉沢「誰かの真似をしたとか誰かのようになりたいと思ってやってきたわけではないのでよく分からないが、深田、諏訪多君達の中では一番早かったかも知れない。もっとも、木暮さんとか小島さんとか、古い先輩達の中にも同じような人種はいる。深田君と言えば、彼の代表作である「日本百名山」は、彼が全て頂上に立ったと云っているが、登っていない山が幾つか入っているようだ。こういうことが気になるのが意地悪の性格のせいかも知れない。」

問「それはご本人から直接お聞きになったのですか？」

吉沢「いや、ある人がそう云っていた。」

問「あの本の後記には、全部登ったとはっきり書いてあるし、登ってみもしないで選定するのは入社試験に履歴書だけで採否を決定するようなもので、私の好まないところだ、と述べているから、信じがたいことだが、もし本当なら、深田さんの云っている選定基準は、原則としてということなのかな。ところで、吉沢さんは、吉沢百名山を選んでみると言った趣味はないんですか？」

吉沢「俺にはそんな面倒くさいことはとても出来ないよ。」

問「吉沢さんは率直な人だから誤解も受けやすいことがあるかも知れませんが、登山観としては「山へ」の一五八ページに書いている次のような文章が吉沢さんの気持ちをよく表しているな、と思いました。〈私の登山は、巻末にある山歴をみればおわかりのように、ことの大小を問わず、要するに山旅の範囲を出ていない。極限に挑むなどという大それたことはやったことがない。いうならば、明治の先覚者たちの猿真似をして来たに過ぎないのである。極限に挑みたいひとは挑めばいい。私にはそれを咎める積もりも資格もない。人は自分の好きなように登ればいいのだから。〉もう少し格好をつけたり、偉そうなこと云って欲しいと期待する人達がいるかも知れません

が、吉沢さんのこういう飾らない所に魅力を感じている人が多いと思います。」

吉沢「ノー・コメントだな。」

問「「北の山・南の山」を出版されたのが昭和十七年、その年には二人のお嬢さんを連れて八ヶ岳に登ったり、奥利根に出かけたりしていますが、その後は山行が途絶えています。戦争が激しくなるとともに山どころではなくなっていった事情はよく分かります。戦後も大変なことが多かったと思いますが、吉沢さんも、昭和三十六（一九六一）年にわれわれを連れて、アンデス遠征隊長として山の表舞台に登場するまでは、約二十年間、登山の世界から離れた生活を送らざるを得なかったわけですね。この間は、山に登る機会もあまりなかったでしょうし、山について執筆されることもなくなった。日本山岳会の「会報」に改めていろいろ書き始めたのが昭和二十八（一九五三）年ですね。その当時は、どんなことをお考えだったんでしょうか？確かに、食べることに精一杯で、山にうつつを抜かしていられる時代ではなかったと思いますが、このままずっと山とは縁が切れて仕事人間として生きていることになると考えていたのでしょうか。それとも、何か特別なことを考えておられたのですか？」

吉沢「俺はそんなに難しいことはわからないし、何も考えたことはありませんよ。全て成りゆきだね。」

問「それでも、山の本はその間もずっと読んでいたのでしょう？」

吉沢「読んではいたが、外国の本を買って読むことは少なくなっていたなぁ。もっとも、どんな本も隅から隅まで精読することはあまりないけどね。」

問「随分多くの国の登山事情に精通されていますが、吉沢さんは一体何ケ国語をマスターしたんですか？」

吉沢「マスターなんておこがましいよ。」

問「英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、イタリア語あたりは、自由に読み書きしているようにお見受けしてますが。」

吉沢「そうでもない。いつも苦労しているよ。」

問「吉沢流読書術というものがあるんではないですか。その結果、あれだけ膨大な情報を自分のものとして吸収されているのだと思っています。ロシ語なんかも辞書を引きながらだったら結構何でも読むんじゃないですか？」

吉沢「ロシア語はそうはいかない。」

問「中国語は辞書があれば相当な資料でもこなすのでしょう？」

吉沢「たまに必要に迫られた時にね。」

問「手紙や報告を書くとすれば、やはり英語、ドイツ語ですか？」

吉沢「まあその二つだね。」

問「話は変わりますが、「山へ」の中に、電通時代は、毎年七月二十日に富士山に登っていたと書いてありますが、これは何だったのですか？」

吉沢「いわば社内の年中行事みたいないもので、毎年やっていた。僕は暫く総務部にいたから、世話役をさせられていた。吉田社長も毎年参加していた。社長は鬼十則なんてつくってがんがんやる怖い人だったし、大変頭が切れたが、僕とは年齢が同じでね。随分可愛がってもらった。」

問「吉沢さんが電通に入ったのは昭和二十三年でそれから十七年務められたわけですが、その前に日本団体生命を辞めて、暫く浪人人生を送っておられます。その頃はそういう人もけっこういたのですか？」

吉沢「日本団体生命を辞めたのは、気に入らないことがあって、こん畜生と思ったからだ。なんの当てがあったわけではない。こんな馬鹿なことをする奴はまずいないだろう。浪人中は山渓の川崎社長などに随分世話になった。」

問「しかし、現在の貴美子夫人とは日本団体生命時代からのおつきあいですよね。戦争末期に会社全体が長瀞に疎開した時、女学校を出て入社したばかりの貴美子さんが東京から書類をもって訪ねてくる度に、胸をときめかせ

ていたのではありませんか。その話をアンデスの時に伺ったときは、こちらも何か胸があつくなりました。あの時は、吉沢隊長宛の女性からの手紙がもっとも数が多かったですからね。」

吉沢「方々から聞こえてくる情報では、必ずしもそんなことではなかったようだがね。」

三、海外登山界との交流

問「戦前から戦後にかけて、他の大学山岳部では海外遠征が相次いで企画され、実現させるところも出てきました。立教がナンダコードの登頂に成功したのが昭和十一（一九三六）年、その年には、京大も大興安嶺に遠征隊を送り出しています。戦後になると、昭和二十六年（一九五一）～二七（一九五二）年に京大がアンナプルナ4峰を目指しましたし、昭和三十一（一九五六）年には日本山岳会がマナスル登頂に成功しました。そういう流れの中で、自分行ってみたいとか行ってやろうという気持ちは持たれなかったですか？」

吉沢「行きたい気持ちが無かったわけではないが、それだけの資力もなかったし、皆を説得して引っ張っていく力もなかったので、自分の問題として考えることはなかったなぁ。」

問「しかし、海外の山に関しては、吉沢さんにしても望月さんにしても、一橋OBの人達は研究もしていて、情報も沢山もっていたので、いろいろな人達の相談に預かることも多かったのではありませんか。もったいなかったですね。」

吉沢「一九七〇年に諏訪多さん達と日本HKT（日本ヒンズー・クシュ会議）という組織を発足させ、ヒンズー・クシュのことを研究している人、登山家でヒンズー・クシュに行ったことのある人、これから行くつもりで計画を練っている人が集まって、定期的に会議をもってきた。この組織の元になったのは、一九六四年にザルツブルクで開かれたオーストリア山岳会主催のHKTだった。中心的人物はアドルフ・ディームベルガーで、彼は自分では登らないのだが、物知りで、記録を集めていろいろな情報を発信していた。一九六八年に世界一周の旅行をした時にHKTのことを知って、その真似をしたわけだが、こういう生き方もあるということだ。」

問「吉沢さんは多くの著名な登山家や登山研究者と長年に亘って文通をされているようですが、戦前から続けている人もいるのですか？」

吉沢「文通を始めたのは情報交換が主目的だから、戦後、それも大半は、日本の登山隊が海外で活躍し始めてからだ。戦前から文通していたのはアメリカのK2隊（一九三八年）の隊長だったチャールズ・ハウストンぐらいかな。そういえば、あれは一九七七年のことだ。メキシコでのUIAA総会に出席した後、久しぶりでニック・クリンチに会い、彼のアレンジで会合を持ってくれた時、ここにはK2に行ったことのある人が沢山集まっているが、登頂に成功した隊の隊長だったのは吉沢君だけだね、と大笑いになった。」

問「海外とのつき合いが随分長かったので昔から海外の山岳会に入っていたかと思ったのですが、英国、アメリカ、カナダの各山岳会に実際に入会したのは昭和四十四（一九六九）年だったんですね。」

吉沢「そう、前の年に世界一周してからだね。」

問「アメリカ山岳会の会長だったニック・クリンチさんと文通を始めたのは昭和三十二（一九五七）年と伺っていますし、アンデス遠征の前後を含めて、親密なつき合いぶりは有名ですが、サンフランシスコに行けば当然お宅に泊まられるのですね。」

吉沢「クリンチはいつ行っても大変な世話をしてくれてね。友達というのは有り難いものだ。行くときにはいつでも彼の自宅に泊めてもらうことを計算に入れて出かけるわけだ。彼の方も喜んで歓待してくれるのだが、彼も一流の弁護士として忙しく動き回っているから、帰ってこない時もある。そんな時には、僕の部屋を自由に使ってくれ、どこの引き出しを

開けてもいいし、欲しい物があれば何でも持って帰って結構、と云ってくれるんだ。」

問「そういうスケールで世界中の著名な登山家達と交わった人は滅多にいないんじゃないかな。羨ましいと同時に大変素晴らしい。」

吉沢「ありがたいことです。」

問「エドモンド・ヒラリー卿が日本に来られた時もお世話をされましたね。」

吉沢「一週間の旅は本当に楽しかった。」

問「あの時ご一緒だった奥様のルイーズさんはその後昭和五十（一九七五）年にネパールでの飛行機事故で亡くなられたのですが、平成二（一九九〇）年にジューンさんという方と再婚されました。この新婦のご主人だった方はピーター・マルグルーという登山家でヒラリー卿の学生時代からの大親友だったんですね。ヒラリー卿が隊長を勤めたマカルー隊に参加して一九六一年に右脚を失っています。ジューン夫人の献身的な介護ぶりは女性の鏡と云われたそうですが、このマルグルーも一九七九年にニュージランド航空のDC10機が南極でエレバス山に激突す大事故（注：二五七名全員死亡）を起こした際不幸にも亡くなりました。結局、長年の親友で家族ぐるみの親密なつき合いだったのに、飛行機事故で連れ合いを失った者同士が随分時間がたってから結ばれたわけです。私（中島）は、一九九一年にヒラリー卿夫妻とイギリス砂漠をラクダで横断するトレッキングで一緒になり、そんな秘話を伺いました。」

吉沢「それにしても、ルイーズという人はいい人だったねぇ。活発でね。確か、南極でのその大事故の際、今井通子さんのご両親も亡くなっているんじゃないかな。親孝行の南極旅行プレゼントが仇になってしまった、と聞いたことがある。事故と言えば、バークリーにあったファーカール老の古い立派な邸宅が火事で全焼してしまったんだ。彼はスタンフォード大学の名誉歴史学博士だったが、大変な山の本の収集家で、それこそ、山の本だったら無い本が無いと言ってもいいくらいだったが、火事で全部焼けてしまったそうだ。惜しいことをしたものだ。日本でも、神戸の津田周二さんは山の本、特にクラシック本を沢山もっていたが、シュラーギントワイトの四冊揃った貴重なものを持っていた。これを松方三郎氏に貸したらしいのだが、松方さんが先に亡くなられて、結局行方不明になってしまった。こういう話は実は沢山ある意味で必然だった。本を貸す時はちゃんとしておかなければいけないなぁ。」

四、山の人生を振り返って

問「昭和三十六（一九六一）年に一橋で初めての海外遠征隊をアンデスに出した時、吉沢さんに隊長を引き受けていただいたわけですが、吉沢さんを担ぎ出したのは中村さんということになっています。吉沢さんのお気持ちは別にして、中村さんは何故吉沢さんを引っ張り出そうとしたのですか？」

中村「何故って云っても、私も山登りで五年間も大学にいたしね。やはり、海外の山を登ってみたいと考えていた。その当時は、誰もがヒマラヤにターゲットを置いていた。しかし、インド・中国関係が悪化して、ネパールに入れない時期が二年程続いたりして、目標の変更も考慮せざるをえなかった。そんなことでアンデスに目をつけたのだが、ヒマラヤ以上に情報も知識も乏しく、現実のためには大先輩の吉沢さんを担ぎ出すのが近道と考えた次第。最初のアイディアはワイワッシュだったが、さすがに調べが行き届いていた吉沢さんのことだから、最後に残された六〇〇〇m峰のプカヒルカ、探検的要素の強いアポロバンバ、ププヤ山郡が候補に挙がってきて、計画の骨子が固まった。こう考えると、吉沢さんの隊長はある意味で必然だった。」

問「最初に中村、丸山さん達が吉沢さんを訪ねた時は、隊長になってもらうお願いよりも相談の要素が強かったかも知れないが、その後の展開を見てみると、吉沢さんは自分で行くつもりで調べていたような感じさえするので

すが。」

吉沢「偶然だったけれど、クリンチと文通していて、プカヒルカが未登峰であることは分かっていたからね。そのクリンチからプカヒルカを薦められてた事が大きい。だから、クリンチには、「僕の人生を変えたのは君だよ」って云ってるんだ。しかし、これは後の事になるが、K2に行ったときは感激したね。ベースキャンプから上を見上げて、首根っこが痛くなる程高いところに頂上を見た時は、ああ来たんだなあ、来てよかった、としみじみ思った。」

問「あの時は吉沢さんは随分まめに写真を撮っていましたが、写真は昔からですか?」

吉沢「そうね。アインシュタインが日本に来たことがあるんだ。大正時代だね（注：大正十一年、ノーベル物理学賞を受けた翌年）。誰に聞いてもよく分からないから、それじゃ写真を撮ってやれと思って、会場の外に立ってずっと待っていたんだ。そうしたら、慶応の福田徳三博士と一緒に出てくるのを見かけて写真を撮った。十枚位はあるはずなんだが、目下行方不明で一生懸命探してるところだ。」

問「それは貴重なものですね。しかし、その当時カメラを持っている人は滅多にいなかったんじゃないですか。」

吉沢「アメリカ製の安物のカメラだった。」

問「同じ頃スワン・ヘディンが来ていませんでしたか?」

吉沢「覚えがないなぁ。」（注：ヘディンの来日は明治四十一年）

問「吉沢さんは翻訳その他で多くの外国の登山家、探検家紹介してきましたが、アルネ・ネスとか、シプトン、ティルマン、ネイ・エライアスといった、どちらと言えば地味な人が多いように思いますが、これはご自分の好みですか?」

吉沢「そういえば云えないこともない。ヤングハズバンドとかネイ・エライアスとか探検に明け暮れて発見したものに興味がある。ネイ・エライアスといえば梅棹忠夫の本を読んでいたら、イランでモンゴル族の集落を発見する箇所が出てくるのだが、あたかも自分の発見のようにかいてあったが、実は、ネイ・エライアスが既に十九世紀の半ばに同じことを報告してあるんだ。こういうのを見ると、こん畜生と思っちゃうんだなぁ。」

問「ネイ・エライアスなんて人物は吉沢さんがいなかったら日本で紹介されることは無かったかもしれませんが、こういう人物に着目する臭覚はやはり長年の蓄積によって生まれてくるものなんでしょうか?」

吉沢「そうね、まず沢山読むことが最初だね。」

問「西木正明の「梟の朝」は全部読まれました?」

吉沢「読んだ。面白い本だが、少し作りすぎの感があるね。山渓のコラムでこの本にも触れたんだが、全部フィクションで嘘だけど、面白いからいいじゃないか、と書いたんだが。これが結論だな。」

問「そうでしょうね。しかし、イタリアでティルマンがインテリジェンスの仕事に関わっていたかも知れない時代に日本人に会っているかどうか、実は〈Men and Mountain meets〉の当該部分を当たって見たのだが、まずティルマンが日本人に出会った形跡はないね。」

吉沢「ティルマンなんて人物をからませずに書いた方がもっと面白く書けたかもしれないね。一九三七年ブータンとシッキムの国境にあるチョモラーリに初登頂したチャップマンは、シッキムのピラミッド・ピークに試登したりしているが、彼が英国のスパイなんだね。日本軍のマレー半島南下作戦を妨害するために暗躍するのだが、そのことを書いた〈Jungle is neutral〉という面白い本があるんだ。F機関がからんでいるんだが、波瀾万丈の活劇がたっぷりあって飽きさせない。これは、僕がほとんど訳し終わって、後少しだけ残っているだが、完成させて出版したらベストセラーになる可能性がある。これが最後の翻訳書になるかも知れない。いろいろと協力を申し出てくれる人もあるのだが、気に入らないんで

放ってある。」

問「吉沢さんが翻訳した本の中で一番やり遂げたという実感のある作品はどれでしょうか？」

吉沢「やっぱりジェラルド・モーガンの〈ネイ・エライアス伝〉だね。」

問「ここに吉沢さんが「山岳」に寄稿したもののリストがあるのですが、随分沢山書いていますね。この中で一番思い出に残っているのはどれですか？」

吉沢「どれっていうものはないが、随分書いたもんだね。」

問「山日記の編集もかなり長い間やっていましたよね。」

吉沢「そうね山日記は苦労した。死んだ家内がいろいろ協力してくれた。第一号は昭和五年（一九三〇）年にでたのだが、一部も残っていないだってね。それじゃというので、僕の持っていたのを寄付しておいた。」

問「いろいろ書き込んであるのではないですか？」

吉沢「それはそうだが、家に置いておいても宝の持ち腐れだから。」

問「吉沢さんは「山岳」の編集はされたことがないんですね。」

吉沢「ないはずだ。しかし、「会報」の編集は随分やったね。芸は身を助けるというけれど、二度目に日本団体生命に入って社報の編集をやった時、「会報」の編集をやった経験が大いに役立った。」

問「昭和二十二（一九四七）年に日本団体生命を辞めた時は、気に入らないことがあってこん畜生と思った、ということでしたが、二度目の日本団体生命入社は昭和四十（一九六五）年。昔のこだわりは無くなっていたわけですよね。」

吉沢「そもそも辞めたのは自分の責任だったし、日本団体生命の人々には愛着があった。私をいつも暖かく見守ってくれていたシゲハル（注：山中重治）が社長だったことも勿論大きかった。シゲハルは、府立一中、一高、東大卒の典型的な秀才だったが最初に勤めたところが都新聞（注：東京新聞の前身）で、その頃は、新橋界隈のおねえさん達の記事で有名な、いわゆる赤新聞だった。そこで一緒だったのが小島六郎、渡辺公平といった登山家達だったのが大いに幸いした。私がいつも山に出かけるのを大目に見てくれたのも、社報の編集という名目で二度の入社を薦めてくれたのも、全て彼のお陰です。」

問「吉沢さんはよく俺は運がいいと言っておられますが、運も実力の内と言いますからね。ところで、遭難して危ない目に遭ったということはあるんですか？」

吉沢「学生時代に小西股源流で岩魚とりに助けられたことがあったな。一晩ビバークしたんだが、助けられて気がついたのは、何のことはない、小屋のすぐ側だったんだ。」

問「他にありますか？」

吉沢「あれは法政の田中菅雄と一緒に、光次郎と亀之助を連れて剣、立山から黒部を越えて針ノ木峠に出た時、針ノ木の雪渓を下りようとしたら、光次郎が吉沢さんは必ずここで落ちるから俺が下で待っていると言うんだ。まさかと思ったんだが、お説の通りに滑り落ちて、光次郎に助けられた。」

問「吉沢さん達が東大谷の左股を初登したのは昭和五（一九三〇）年八月ですが、あの時は他のチームとの競争は意識したんですか？」

吉沢「それは全くなかった。しかし、あれは本流を登っているつもりで実は左股を登っただけのことで、もしその時谷の奥まで詰めていたら、落石でやられていたかも知れない。これも命拾いしたケースだな。そういえば、朝日岳に行った時にピッケルを流しちゃったこともあったなあ。ピッケルがわが身の身代わりになってくれたわけで、今もダムの底に眠っているかもしれないピッケルに感謝しなければいけない。」

問「吉沢さんの記録を見ていて、今の基準からしても凄いと思うのは、昭和十（一九三五）年七月団衛谷下降ですね。吉沢さんが三十二歳の時ですよね。近藤さんに望月さんもいま

したね。燕に登って団衛谷を下って、北鎌尾根を登って槍沢を下りる計画でした。途中でコースを変更しましたが、夏休みを利用してサラリーマンがよくこんな山行をできたなあと感心してしまいます。大変野心的ですが、こういうことが出来たというのはいい時代だったんですね。」

吉沢「そうだったのかも知れない。山に行っては会社を休んで迷惑ばかりかけていたなあ。あれはイタリアのピエロ・ギリオーネと会った時のことだ。一九三九年、昭和十四年だった。私自身は三十五歳だったが、彼は当時五十六歳、新聞記者として来日したのだが、ぶらっと日本山岳会のルームにやってきて、本を読んでいた僕と出合い、その後、帝国ホテルの彼の部屋を訪ねて大いに話し込んだ。彼は一緒にどこかに行かないかと云うんだが、こちらはヒマラヤもカラコルムも行ったことなんてあるわけがない。駄目だって云ったら、今度は一年位私の家に泊まって、その間訓練すればいいって云うんだ。じゃやろうかと答えたら、それが新聞に出ちゃったんだ。会社でも、一年位なら休暇を使って行ってこいということになってしまった。結局、戦争が始まってこの話はとん挫してしまったが、もし行っていたらその後どうなったろう、と時々考える。」

問「ギリオーネと会ったのが吉沢さんだけだったというのも奇縁ですね。それこそその時イタリアに行っていたら人生が変ったかも知れませんね。」

吉沢「そうだね。しかし、その後時々文通があって、確かK2の登頂成功の時だったと思うが、イタリア語の報告を英文に直してくれないか、と手紙を出したら、出張中だからというので、奥さんがきれいに英訳したものを送ってくれたことがあった。」

問「リカルド・カシンには会ったことがありますか？」

吉沢「クリンチの家で会ったことがある。その後、来日した時にも会った。しかし、彼はイタリア語だけしかしゃべらないので、話の内容はよく分からなかった。」

問「大分時間が経ったので、そろそろまとめに入りたいと思いますが、吉沢さん、日本の山岳界というか、われわれ後輩に何か云っておきたいことがありませんか？」

吉沢「無理をしないことだな。この間もヒマラヤに行く若い友人に、失敗は付きものだし、決して無理するな、山は登るだけでなく、下ることも大切な山登りの一部だ、必ず生きて帰れよって手紙を出しておいたんだ。」

中途半端ですが、時間が来ましたので、このへんで終わらせていただきます。吉沢さんには長時間にわたっておつき合い戴き、ありがとうございました（文責：中島）。

シルバー・ピーク

石原　脩（昭三十）

インディアン・サマーが、一・三日前に終った九月十六日。シアトルはお馴染みの曇天だった。その中に僅かな青空を見つけたので、遅いけれども一一時半にワシントン湖畔から出発した。シアトルのダウンタウンから東進する五十号線にのり、十二時半に、カスケード主脈のスノウコルミー峠に着く。

目指すシルバー・ピークは、峠の南面に広く展開するスキーリフトの各頂稜から、オラリー牧場を隔てて、三K乃至五K米の南奥に屹立する。五六〇五フィート（一七〇八米）の高度だが、森林限界から二百米の岩峰を見せて、アルペン的な風格のある山である。

峠から五十号ハイウェイに別れ、全てのスキーリフトの基部を過ぎて、右折し九〇七〇号林道に入り、オラリー・メドウの登山口に至る。

十三時三十分。相変らず指導標はない。

ポンティアック・トランザムを牧場に残してピークの東面をトラバースするトレイルに入る。

深い針葉樹林の中を四十分ほど進んだところで、トレイルを補修している屈強な五人に出合った。皆で口々に「ブラー、ブラー」と叫ぶので「えーっ」と聞いたら、「こいつら日本人だ、英語知らないぞ」と一人が仲間に言った。

しゃべれない東洋人は、大旨日本人だとの定評ができているらしい。

あわてて、「シルバーピークに行くんだ」と言ったら「クォーター・マイルで右へ登れ、判りにくいぞ」と親切だが、加えて下方を指し「ダイナマイト」ときた。後続の女房が「BLAST!」と叫ぶ。とんでもないと駆け出したら、はたして五分後にドカンときた。

トレイルから右折して尾根に出ると雰囲気は一変した。池糖をめぐり、矮小化し風下に枝を拡げる栂を縫って北上すると、堆石の急斜面を経て、草つき混じりの岩稜となった。

霧の中を、数米おきに振りかえり、帰路を確認し乍ら登る。

女房が速い。時折、霧がとんで、左下に高差五〇〇米のアネット・レイクが西陽に鈍く光り、高度感充分なのだが、岩歩きに天性のものがあったのか？　それとも自分が衰えて、六才の年の差が効いてきたのか？　三十六年間を経てなおも大いなる疑問となった。

十五時四十五分頂上着、リッヂはナイフの歯のようで、座るところが無いので十分間で退散する。

帰路、背後から女房が「なんで、こんな素敵なところに、いままで私を連れてこなかったの！」と文句をいうのを聞き乍ら、東側の垂壁に迷い込まぬよう、注意して降りる。

途中、稜線のコルの反対側に位置するピークの岩壁が、ルネッサンス期の油絵のように鮮明なのだがいかにも不気味なのに気がついた。地図によると、その山名は「アベル」とあった。

トレイルを下降中に、かの五人が百二十五ccほどのマウンテン・バイクで帰るのに出合う。

すさまじい騒音の中で考えた。日本山岳会の会報の中に、米国の山道補修ボランティアの楽しげな記事があったので、何時かチャンスがあったら試みたいと思っていたのだが、岩や倒木を乗り越して行く連中の体力・技術を見せつけられ、諦めた方が無難だと感じた。

暗い針葉樹林からオラリー・メドウに出ると、夕陽に映えたスノーコルミー北面の山並みが整

列して迎えて呉れた。
デザート用のハックルベリーを摘んで、十八時に帰途についた。
（カスケード山脈の名称由来）
地勢的には、太平洋側から北米大陸プレートの下にゴルダ・プレートが潜りこみ、隆起と火山帯が造り込んだ山脈である。
しかし、日本列島と違って、反対側も大陸なので、ロッキー山脈西面の水がアイダホ州に貯って、その出口がコロンビア川となり、ワシントン州とオレゴン州の境界をなして太平洋に注いでいる。
かくして、ワシントン・カスケードとオレゴン・カスケードに二分されているが、カスケードの名称由来はこのような地勢から来たものではない。
一九三三年の連邦地理学院のレポートまでは「プレジデント・レンジ」などと主張する人もいて勝手な地名が地図に記されていたようだ。
名称由来は、一八四一年のウイルクス探検隊や一八五三年の鉄道調査隊が東からやって来て、何れもコロンビア川を下降したところ、太平洋に近づくと、両岸から滝ばかりの所がある。
そこで、南も北も滝（カスケード）の山だとの通称が今日の山脈名になったという。（カスケード・アルパインガイド。フレッド・ベッキー著より）

ミニヤ・コンカ初登頂の記録

山本　健一郎（昭三十二）

ミニヤ・コンカという山が四川省の奥にあることは皆さんもご存じだと思います。そしてこの山に出かけた日本の遠征隊は、北海道岳連隊の八名が遭難、市川山岳会隊の登頂パーティが山中に置き去りにされ一名が死亡、松田隊員が現地住民に救助される事件などを起こしたことは皆さんもご記憶でしょう。結局日本からの五隊が延べ十三名の犠牲者を出し敗退、ようやく今年の春になって、北海道のパーティが登頂に成功しました。ところでこの山の初登頂は何時どこの隊によって記録されたかご存じですか。
ミニヤ・コンカ（七五五六米）は一九三二年（昭和七年）十月二十八日アメリカ隊によって登られました。これは当時カメット（七七五六米）に次ぐ人類が登った第二の高峰でした。装備、技術が格段の進歩を遂げた今、日本隊がこれだけてこずっている山に五十年前に登ったのは大変な偉業だといえます。このアメリカ隊の記録は「MEN AGAINST THE CLOUDS」という題で一九三五年に出版され、一九四〇年（昭和十五年）に望月達夫さんの手によって日本山岳会の「山岳」に紹介されています。この本はなかなかの稀覯本で、当時日本に何冊も入ってこなかったようですが、吉沢一郎さんもお持ちです。この珍しい本がなぜ両先輩の手元にあるかというと、立教のナンダ・コート遠征に刺激された当時の先輩方が、ミニヤ・コンカとその周辺の山を目指す遠征隊を出したいと考え、研究を進められたという事情があったようです。
私は望月さんからこの本を長い間お借りして、翻訳を進めてきました。元の原稿はもう十年くらい前に出来ていたのですが、なかなか出版を引き受けてくれるところが見つからずお蔵入りとなっていました。ところが京都の「ナカニシヤ出版」が引き受けてくれることになり、近く刊行されることになりました。私がお借りした望月さんの蔵書は、現在日本山岳会の望月文庫のなかに収められています。余談ですが日本山

岳会の図書室には、望月文庫とならんで、磯野計蔵さんが寄贈された磯野文庫もありますので、機会があったら是非一度ご覧下さい。

このアメリカ隊の記録は、波乱にみちた登山の様子に加え、往時の中国の旅行記としても大変面白く、冒険とロマンに満ちた物語です。なにしろ上海を六月十四日に出発して、頂上にたどりついたのが十月二十八日と聞いただけで、どれほど苦労したか想像できるでしょう。

上海事件直後の上海から匪賊の銃撃の危険をおかし揚子江を武漢三鎮、三峡と遡る十日の船旅、重慶から小船に乗換え岷江を楽山を経て成都まで七日かけ、バスと人力車とサンパンを目まぐるしく乗りつぐ成都から雅安までの旅。それからチベットの玄関打箭炉（今の康定）までの山越え八日の徒歩の旅、そのどこを読んでも当時の中国の内陸部の事情が詳しく描かれていて、興味深く夢中になります。

さらに面白いのは、初登頂から二十五年遅れ一九五七年に中国隊が登った記録です。中国隊は頂上に何もなかったので、アメリカ隊は登頂は嘘である。ミニヤ・コンカの初登攀は中国隊のものであると主張しました。この中国隊の主張をめぐり当時一騒動ありましたが、この本に載っている頂上からのパノラマ写真を見ればアメリカ隊登頂の事実は疑うべくもありません。

一九五八年のアルパインジャーナルには、今や疑いは中国隊に向けられた。「中国隊は頂上にケルンを積み、記録を書いた紙を入れた缶をその下に埋めた」と言っているが、アメリカ隊によれば「頂上は厚い雪と氷に覆われ、高差三〇〇米も下にしか岩が出ていなかった」のにどうしてケルンが積めたのか、この疑問に答えるべきであると書かれています。ところが中国隊は「缶を頂上の雪の中に埋めた」と書き直した報告を翌一九五九年に刊行しています。

アルパインジャーナルでは中国隊の登頂を認めていないようで、一九八二年春のスイス隊、秋のアメリカ隊、一九八四年秋のドイツ隊が登頂に成功していますが、一九八五年のアルパインジャーナルを読むと、中国担当のクリス・ボニントンはドイツ隊の記録を第四登として紹介しています。

そのほかにも中国隊の記録には面白いことがいっぱいありますが、長くなるのでこの本の訳者「あとがき」をお読み頂ければと思っています。余り売れそうにない本を半ば私費出版のような形で引き受けてもらいましたので、この本が売れないと私は本の在庫を抱えて自己破産しそうです。針葉樹会の皆さんは是非一部といわず、何部かお買い上げ下さり友人にもお配り頂ければ幸いです。

（ミニヤ・コンカ登頂記は、一九九八年春にナカニシヤ出版より刊行されました。）

梅里雪山巡礼記

雲南省西北部、一九九六年

中村　保（昭三十三）

（本稿は、The Himalayan Journal, Volume 53、1997に掲載された紀行を山と渓谷社が翻訳したものである）

「十月三十日に君から届いた写真入りの手紙、ありがとう。それからカン・カルポ山系踏査の成功、おめでとう。あそこは一番おもしろい土地だね。ぼくらが行ったときはずっと天気が悪かったから、僕は君の写真がうらやましいよ。僕の撮った写真のほとんどは雲しか写っていないからね。ミスター・ニマはとても好い人物だ。何度も巡礼の旅をしていて、何処でとまればいいのかとてもよく知っている。」

ニコラス・B・クリンチは中国の雲南・チベット国境で私が行った旅についてそう書き送ってくれた。

一九九六年の三月に「ヒマラヤの東」（山と渓谷社刊）という本を出版したとき、すでに私は次のターゲットを横断山脈にしぼっていた。私はそのエピローグに、「深い浸食の国」に焦点を当てたより包括的なテーマを持った探検にとりくむであろうこと、そしてその手始めに、メイリ・シュエシャン（カン・カルポあるいはカ・カル・ポ山系）を巡り、サルウィーンとイラワジの分水嶺を越えてイラワジ川の源流へと至る可能なルートを探る旅を試みるであろうこと、を書き記した。

梅里雪山（土地のチベット人はカワグボと呼ぶ）は、チベット西部のカイラスほど有名ではないが、古来からチベット仏教にとっての聖なる山である。遠くはなれたチベット東部や青海や甘粛、四川、雲南などから何千人もの巡礼者がこの聖なる山を訪れる。この山塊を望見した最初の外国人はフランスのローマカトリック教会の伝道師達だったと考えられる。彼らは一八六〇年代初頭にツァワロンにいくつかの居留地を作った。しかし、登山という観点からの探査をはじめて試みたのは、一九一三年に梅里雪山の最高峰、カワグボ峰（六七四〇米）の東側氷河に入域した、F・キングドン・ウォードである。その後半世紀以上にわたる長い空白を経て、一九八七年に日本の上越山岳会がカワグボ登頂をはじめて試みた。一九九〇年から翌九一年にかけては、中国と日本の京都大学との合同調査隊が最高峰に挑んだが、予期せぬおそろしい悲劇に見舞われた。一度の雪崩で十七名の隊員の命が失われたのだ。京都大学は一九九六年に再びこの山にやってきたが、ルート上の氷河の状態が非常に悪く危険なため、またもや失意のうちに敗退した。その間、一九九二年と九三年にはN・B・クリンチを隊長とするアメリカチームが第二峰（六五〇九米）に挑んだが、成功しなかった。

梅里雪山を巡る約三〇〇kmの巡礼の道は、チベットを通って雲南とラサを結んでいる交易路（茶馬古道）の一部でもある。デーチンを発ったキャラバンはメコン川（ランツアン・ジャン）を渡り、主山塊の南にあるドケ・ラ（四四七八米）を越え、サルウィン川（ヌ・ジャン）に下り、山塊の北側の部分にあたるシュ・ラ（四八一五米）を越えて、デケンへと戻ってくる。徒歩で十日から十三日ほどかかる。私の知る限り、K・ウォードが一九一一年から一二年にかけておこなって以来、この巡礼路の全行程をたどった外国人のチームはたった二つしかない。一九九三年のN・B・クリンチのチームと、一九九

五年のスペイン人とフランス人の二人組である。ということは、私は外国人として四番目ということになる。また、二十世紀のはじめにM・バコット、F・M・ベイリー、エドガー、A・D・ニールらがツァワロンに入り、巡礼路の一部をたどったことが記録に残っている。

今回の計画へと私を駆り立てたのは、民俗に対する興味や、チベット人の巡礼者と一緒に歩くというようなことだけではなく、それ以上に、「深い浸食の国」に隠された、誰も踏み入ったことのない山を望見したいという願望であった。かの地にはいまだ探査されていない広大な地域が残されている。梅里雪山の西側や、そのさらに北西にある、地図には載っていない横断山脈の雪をいただいたピークなどはとても魅力的で、たとえ結果が満足できないものだったとしても、その秘密のベールを取り去りたいと強く思ったのだった。それに加えて、ツァワロン地区の現在の状況を見、ごたごたが続いている中国・チベット国境のジオポリティカルな歴史を調べるということにも大きな価値があると考えていた。

しかし、計画を実行するにあたっては、二つの問題があった。まず、私はその地域に関して、クリンチによって与えられた以上の情報を得ていなかった。そして、雲南省の当局によって作成された地図が二枚手に入ったものの（ゴンシャン県の一／二二五〇〇〇と、デーチン（徳欽）県の一／四〇〇〇〇〇）、巡礼路の全ルートをカバーする地図として手元にあったのは、アメリカ防衛地図作成局のONCとTPCだけであった。巡礼路のチベット側の部分をカバーする中国作成の地図は手に入らなかった。

一九九六年十月二日、私は香港経由でクンミン（昆明）に到着した。翌朝、私は飛行機でリジャン（麗江）に飛び、さらにその日のうちにツォンディアン（中甸）まで車で入った。一九九五年に開放されたエアー・サービスのおかげで、クンミンからデーチンへ移動するのに一日節約することができた。十月四日、デーチンに到着すると、十三日間にわたるトレッキングの詳細な計画をたてるため、デーチン県の観光開発局とのディスカッションを開始するとともに、デーチン県長のチチェン氏を訪ねた。氏は中国代表団のメンバーとして京都大学との合意を取り交わすために、一九九六年の夏に日本を訪れている。局員たちは十三日間の踏査ルートを説明し、われわれのキャラバンが通過し留まるポイントの名前を一つひとつ挙げていった。しかし、彼らが地図を持っておらず、また地図を読むことにも馴れていなかったため、それらが地図上のどの地点にあたるのか同定することは困難だった。さらに彼らが挙げた名前のうち、そのほとんどは、ウォードやベイリーが記したものとは違う名前であった。その結果、トレックの間は、一定間隔ごとにこまめに現在位置をコンパスとTPCで確認し、地図上にマーキングしていかなければならなかった。けれども結局そのおかげで巡礼路の詳細で正確なルートマップを作ることができた。

十月六日、雨。われわれは車でデーチンを発ち、メコン川に沿って下り、ヤンツァを目指した。モンスーンの季節はまだ終わっていなかった。われわれのパーティーは総勢五人。そして五匹のラバを連れていた。ル・イドンは一九九三年以来、クンミンにおける私の代理人であり、通訳である。チェンは梅里雪山旅行社のガイドである。ニマ・ツリはヤンツァに住む農夫で、リーダーとしてわれわれのグループを導いてくれる。彼は一九九三年のクリンチ隊にも同行している。

ス・イン嬢はコックとしてわれわれに同行する。ルだけが漢族で、後の三人は皆チベット人である。ヤンツァでメコン川にかかる吊り橋を渡り、昼過ぎに巡礼路へと最初の一歩を踏み入れた。全ての荷物は四頭のラバに分けて載せ、残りの一匹に私が乗ることになった。懸崖と山腹を登る険しい道はヨンジュという小さな村へと至り、われわれはそこに住むニマの親戚の家に泊まった。途中でわれわれは早速、チベット東部のチャムドとツォガンから来たという二つの巡礼のグループを追い越した。

十月七日、天気は朝から悪かった。ヤンツァとメコンの分水嶺にある白芒雪山がメコン峡谷を登ってくる重い霧雨の中にときおり垣間見えた。道は、左にヨンシの村（以前はロンドレと呼ばれていた）を見下ろしながら、尾根の南側に沿って続いた。ロンドレという名は多くの探検家に引用されたが、現在では誰もその名を使わない。まもなく、ドカル・ラへの道は原始林の中の小さな川に沿って続くようになった。増水の泥とごつごつとした不規則な岩のおかげで、流れに沿って進む行程はとても困難なものとなった。ラバたちはあえぎ、列を乱した。午後遅く、狭い峡谷が突然開け、ヨンシトンの小さな放牧地に出た。そこの牧夫の小屋でわれわれは一晩を過ごした。

十月八日。われわれはドケ・ラ、「白い石の峠」、を目指して出発した。われわれの旅の最初のハイライトである。進むにつれて、開いた谷の上に青い空が広がり、紅葉とのコントラストが美しかった。道は主谷を後にして、高い花崗岩の壁を短いジグザグを描いて登る険しい道となり、峠へと通じる広いハイギング・バレーに至った。いくつかの巡礼の団体が、聖なる山を目指し、険しい山道を一列になって登っていた。その光景を見た私は、まるで熱心な仏教徒であるかのように、心が浄化されるような感じを受けた。峠の頂上では、チベット人たちの後について、キルムのまわりを三度まわった。たくさんの祈りの旗が風にはためいていた。尾根の懸崖に阻まれて、峠から雪のピークを見ることはできなかった。峠の反対側には同じような広いハンギング・バレーが広がり、その谷底では七人の女の子と二人の男の子のティーンエイジャーのグループが昼ご飯を食べていた。彼らはチャムドを一月前に発ち、すべての荷物を自分で担いで、ここまでずっと歩いてやってきたのだ。彼らの食事は驚くほどシンプルで、一椀のツァンパと茶だけであった。バターはすでに使い果たしていた。しかし、彼らはとてもタフで、元気で、健康だった。

私は数多くの巡礼者や現地の人々にインタビューした。巡礼者たちがこの巡礼によって何を得ることができると信じているのか、その主要なメリットとでも言うべきものを以下に三つほど記しておこう。

(1) 巡礼を終えた人々には、チェネッィグ（西方の至福の国）で幸福な生まれ変わりが約束される。

(2) 巡礼を終えた人々は、徳の高い僧が一生かかって読む全ての仏教の教典を読んだとみなされる。

(3) 巡礼を終えた人々は、チベットにある全ての僧院を巡ったとみなされる。

われわれはメコンとサルウィンの分水嶺の西方に位置するドカル・ラを越え、チベットのツァワロン地区の領域へと入って行った。現在の中国政府によれば、ツァワロンはザユール県の属県ということになる。ツァワロンは温暖で、チベットの中でも最も豊かで最も人口密度の大きい土地である。ドカル・ラから続いた道は小さな川に沿って下っていった。背景には雪と岩の五〇〇〇米級の峰々がその鋭い姿をわれわれの前に現した。谷を下りていくと、紅葉が、しぶきを上げる小さな滝とすばらしいハーモニーを作り出していた。付近に竹林が目につくようになった。われわれは数時間のうちに亜熱帯域まで降りてきたようだ。巡礼者の多くは竹を伐り、背に担いで家へと運んでいた。われわれは川の流れのそばにテントを張った。

翌朝、幸運なことに、私は主峰カワグボ（六七四〇米）の西側尾根にある、雪を頂いたすばらしい二つのピーク（六一八〇米、五七七五米）を撮影することができた。この二峰だけでなく、私がこのトレックの途中で見ることができた全ての雪峰は未登であり、さらにその多くは未探査である。これは中国西南部のフロンティアにとって、わくわくする興味を持つ登山家たちにとって、わくわくするような事実であろう。十月十日、われわれはロントン・ラ（三五八〇米）を越え、八十人の巡礼者と二十五匹のラバからなる大きな巡礼団とともにアベンの村へと下って行った。男たちと

女たちは祈りの太鼓をくるくる回し、小さな子供も両親と一緒に勇ましそうにゆっくりと歩いていた。彼らはアベンから出発し、十一日間続けた旅をまさに完結するところだった。われわれはアベンの農夫の家に泊まった。大麦から造った自家製の白い酒はとびきり美味く、そして飲みやすかった。

この巡礼路は、松茸の道でもあった。野生の櫟の木（quercus tree）のそばには多くの松茸が生えていた。農夫によって採集された松茸は塩漬けにされてドカル・ラやシュ・ラを越えてデーチンへ運ばれ、そこから日本へ輸出される。松茸は単価が他の農作物よりもずっと高いため、松茸の収穫は中国の遠隔地域の農夫の収入増に大きく貢献している。

十月十一日、晴。両側を数百米に及ぶ高い崖に挟まれた峡谷の道をたどり、サルウィン川とその支流のラカン・ラ川との合流点に到達した。この場所はウォードに「ラ・コー・ラ」と呼ばれ、ニールには「ラカン・ラ」と呼ばれたところで、現在はチュナニコと呼ばれている。私はサルウィン川の左岸の土手の上に立ち、一九九一年にサルウィン峡谷を通ってゴンシャンへと至った旅のことをふと思い出した。一九九六年は雨の多い年だった。茶色く染まった急流がおそろしいほど大量の水を荒々しく押し流していた。土手の上はとても暑く、谷は乾燥し、植物もまばらで、あたりは荒涼としていた。合流点のそばに小さな僧院があり、われわれはそこで一人の年老いた農夫に出会った。彼は友人たちのグループとともに四川のバタン（巴塘）を発って巡礼の旅に出た。しかし、その途中病気で体力を失い、それ以上歩けなくなってしまった。さらに先を目指す友人たちのため、彼はグループから脱落しなければならなかった。それはチベット人の習慣だという。われわれのキャラバンはサルウィン川の左岸に沿って北上した。数kmごとに川は鋭く湾曲し、そのたびにわれわれは急峻な崖に刻まれた不安定な石段を通り抜けなければならなかった。道のすぐ下には濁流が渦を巻いていた。そのような場所でも、ニマは冷静を保ち、安全にわれわれを導いてくれた。その日は温泉のそばにキャンプを設営することにした。

十月十二日。われわれは、とげだらけの野生の梨の木が群生している乾燥した川岸に沿ってさらに北上を続け、昼過ぎにはザナン（一九五〇米）に着いた。ザナンはツァワロン属県の行政の中心で、人民政府と共産党のオフィスがあった。この地域に最初の小学校ができたのは去年のことだった。われわれは村人たちの水場に隣接するとうもろこし畑の中にテントを張った。この村はウォードには「キアナ」あるいは「トラナ」、ベイリーには「トラナ」、ニールには「タナ」と記されている。キャンプから西の方を見渡すと、梅里雪山山塊の第二峰、Ｐｋ六五〇九米が、純白の氷でおおわれたその巨大な西壁を浮かび上がらせていた。その光景は強く私の心を捉え、まるで初めてＶ字谷を通して向こう側を見た登山家でもあるかのような感動を覚えた。子供から老人まで、三十人以上の人々がわれわれのキャンプを訪れ、夜遅くまで帰ろうとしなかった。彼らは親切で、そして好奇心に満ちていた。子供たちは人なつこかった。ウォードはツァワロンの人々について、健康で性格がよく、礼儀正しいと記している。彼はまた、女性たちの美しさについても強調している。村人たちの親切をいいことに、私は大人たちからできるだけ多くの情報を集めようと試みた。次のような情報が得られた。

(1) サルウィンとイラワジの分水嶺を通ってロヒト川上流のザユル地区へ、そしてイラワジ川の源流へ至るルートがあること。

(2) 第二次大戦中、〝ＨＵＭＰ〟（横断山脈）で友軍同士の空中衝突事故があり、今もその残骸が残っていること。

(3) サルウィン川流域のチベット人の間でキリスト教が広まっていること。

十月十三日早朝、サルウィン・イラワジの分水嶺の最南端にそびえる雪峰が姿を現した。おそらくこの山が、Ｋ・ウォードがその著書「青

いケシの国」に記したケ・ニ・チュン・プであろう。彼はその標高を六一〇〇米と推定したが、ゴンシャン県による最近の調査によれば、五一二八米ほどしかないことがわかった。

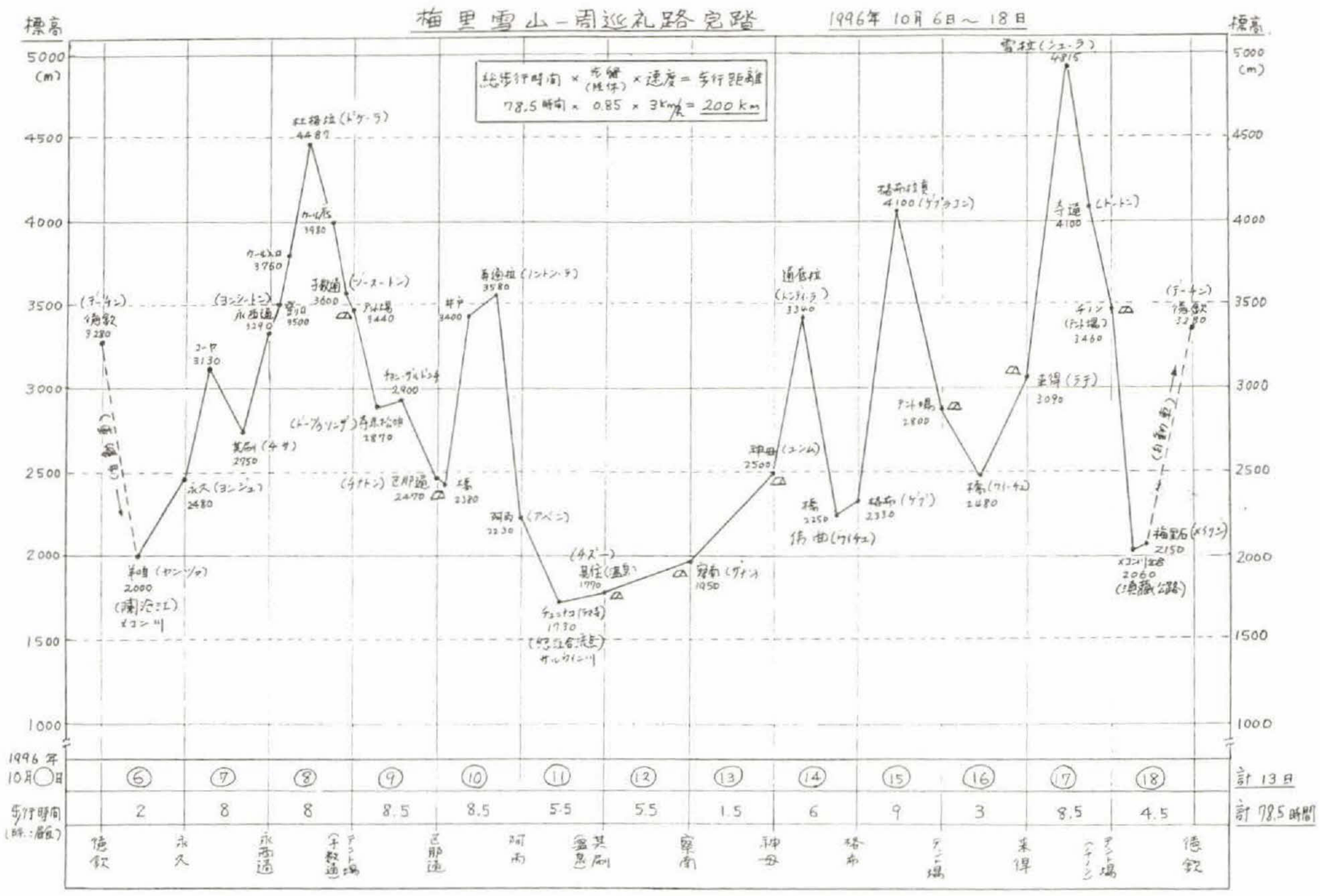
この山は土地のチベット人にはカワカブと呼ばれている。巡礼の道はザナンでサルウィン川を離れ、北進してトンドゥ・ラを登った後、サルウィン川の支流ウィ・チュまで下りてくる。いよいよわれわれは「深い浸食の国」の中心部へと入っていくことになる。峠から下りながら、しばらくの間、ウィ・チュの碧い流れが感動的な狭いゴルジュの間をぬって蛇行しているのを見おろすことができた。S字に屈曲したウィ・チュの急流は、横断山脈（ヒマラヤの東）の特異な地理的特徴をよくあらわしている。十月十四日、われわれはゲブにある僧院に泊まった。ここでもわれわれは村人たちに迎え入れられ、彼らの歓迎の踊りが夜更けまで続いた。

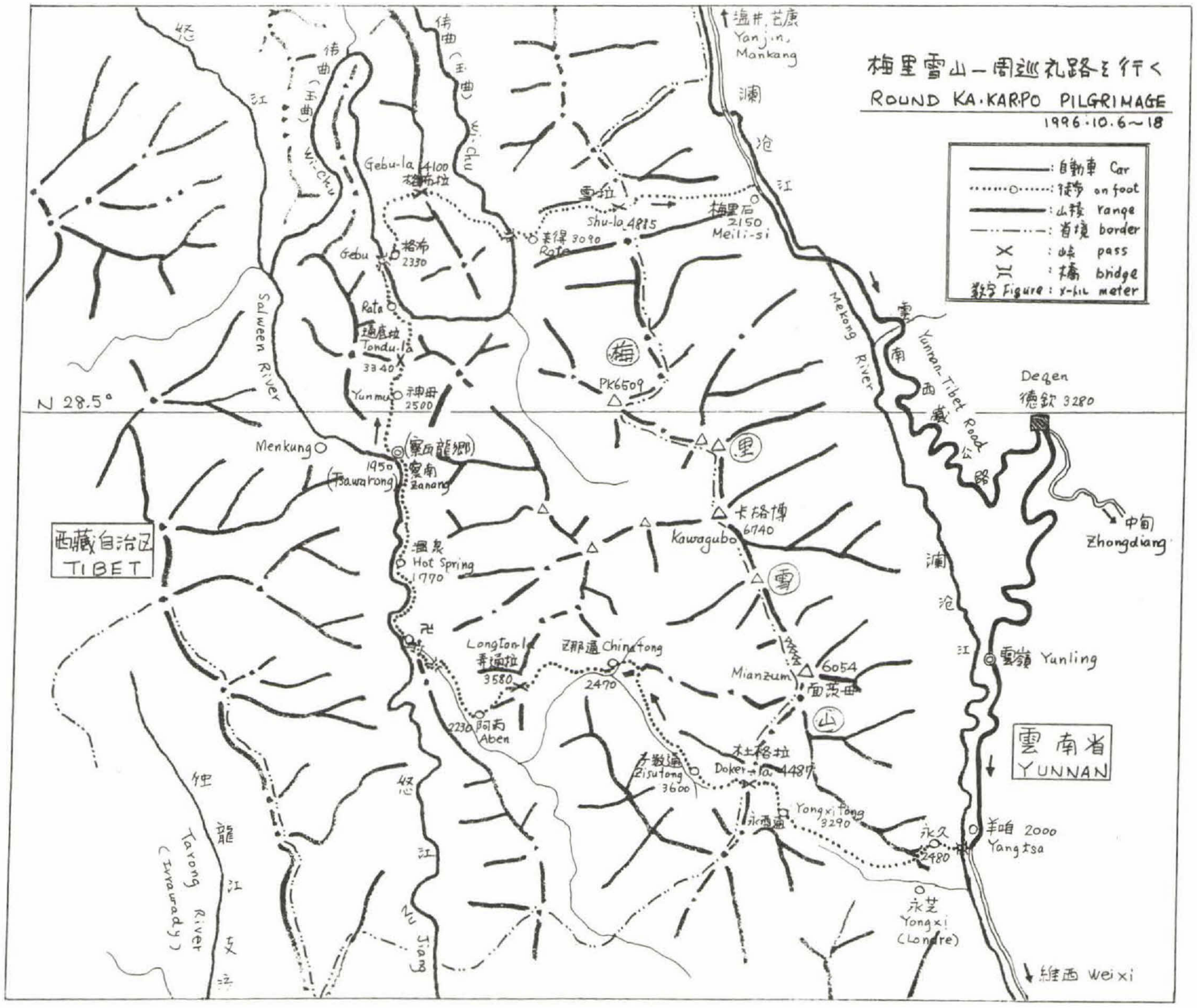
十月十五日、この日は第二のハイライトであった。われわれは直線で一八〇〇米ほどの登り道をたどってゲブ・ラ（四一〇〇米）を越え、再びウィ・チュまで下りてきた。ゲブ・ラからの眺望は最高で、サルウィン・イラワジの分水嶺とサルウィン／ウィ・チュ／メコンの分水嶺がウィ・チュのS字谷の上に一望できた。北西には、伯舜拉嶺山系の南部に位置する六〇〇〇米を越える突出した二つの雪峰が確認できた。ひとつは六一四六米（TPCでは二〇七三五ft）、もうひとつは六〇〇五米（TPCでは一九三八六ft）のピークである。北には、ウォードが「オルボル」と記した輝く雪峰のツイン・ピラミッドが望見できた。おそらく六三二四米（TPCでは二〇七二九ft）のこのピークが、他念他翁山系に位置するメコン／ウィ・チュ分水嶺のダムヨン山塊の最高峰であろう。南東には、Pk六五〇九米の氷のドームがそびえ、アクセス不可能なその北壁を誇示していた。東から北東にかけては、シュ・ラ（四八一五米）や岩の尖頭と小さな死氷河を伴った五〇〇〇米級の峰々が、ダムヨンまで連なっていた。

十月十七日はシュ・ラを越えてメコン谷まで下りる、今回のトレックの最終行程である。われわれはその前日に十分な休息をとり、メンバー全員とラバの体力を蓄えた。ラテの小さな村を発ったわれわれは、気概十分でシュ・ラを目指した。道は険しく、針葉樹や櫟の木（quercus tree）に覆われた尾根を登って行った。途中、ルとチェンが、走り去っていく大きな熊を目撃した。まもなく、カワグボの西の尾根にある五七七五米の傑出したシュガールーフ・ピークが姿を現し、続いて巨大なPk六五〇九米が左手の尾根に次第に見えはじめた。以下はアメリカが一九九三年の九月から十月にかけてPk六五〇九米に挑んだ際の、アメリカン・アルパイン・ジャーナル（一九九四年）からの要約である。

「登山隊はシュ・ラを越えてチベットに入り、西の尾根にベースキャンプを設営した。ルーズな粘板岩や泥板岩の上をsecond rock buttressまで登った後、尾根の上標高五三〇〇米地点に第三キャンプを設置した。しかし、雪崩の状況や尾根をふさぐオーバーハングした雪庇を伴う小さな雪壁などのため、登頂は六一〇〇米付近であきらめざるを得なかった。」

午後三時、シュ・ラの頂上に立つ。私はチェンと一緒に「アイラソー。(神さま！私はシュ・ラまでやって来ることができました……)」と唄った。シュ・ラをとりかこむ周辺の峰々は赤褐色を呈し、何か無機的な世界を眺めているような気がした。突然天気が悪化し、雪が降り始めたが、数分後にはわれわれは再び日差しに包まれた。東には、メコン谷のさらに向こうに、乾燥し荒れ果てた五〇〇〇、六〇〇〇米級の峰々が、泡立つ波のように揺らいでいる暗鬱な雲の下、石灰岩の巨大な墓石のようにそびえていた。われわれは最終ゴール、メコン川右岸の梅里石村を目指し下り道を急いだ。十月十八日、われわれは梅里石村を車で発ち、デーチンへと向かった。


梅里雪山一周巡礼路完踏
1996年10月6日～18日
標高
5000 (m)
4500
4000
3500
3000
2500
2000
1500
1000
総歩行時間 × 充実(休) × 速度 = 歩行距離
78.5時間 × 0.85 × 3km/h = 200km
雪拉(シュー ラ) 4815
紅格拉(ドゲ・ラ) 4487
格布拉 4100
通底拉 3340
徳欽 3280
梅里石 2150
1996年 10月○日
歩行時間 (時:分)
計 13日
計 78.5時間
徳欽
永久
永西通
(手数通)
デット場
巴那通
阿雨
盆地
其刷
察南
神母
格布
デット場
来得
(チャイン)
デット場
徳欽


梅里雪山一周巡礼路を行く
ROUND KA·KARPO PILGRIMAGE
1996·10.6～18
自動車 Car
徒歩 on foot
山脈 range
省境 border
峠 pass
橋 bridge
数字 Figure : x-hill meter
Gebu-la 4100
格布拉
雪拉
Shu-la 4815
梅里石 2150
Meili-si
来得 3090
Rate
Gebu
格布 2330
通底拉
Tondu-la
3340
神母 2500
Yunmu
PK6509
Salween River
Mekong River
Yunnan-Tibet Road
Deqen
德欽 3280
N 28.5°
Menkung
(察瓦龍郷)
察南
Zanang
(Tsawarong)
1950
卡格博
6740
Kawagubo
中甸
Zhongdiang
西藏自治区
TIBET
温泉
Hot Spring
1770
Longton-la
弄通拉
3580
巴那通 Chinatong
2470
Mianzum
6054
面茨姆
雲嶺 Yunling
雲南省
YUNNAN
阿雨
Aben
2230
木格拉
Doker-la 4487
子数通
Zisutong
3600
Yongxi Tong
永西通
3290
永久
2480
羊咱 2000
Yangtsa
永芝
Yongxi
(Londre)
Tarong River
(Irrawady)
Nu Jiang
維西 Weixi

三十六年目の再会

丸山則二（昭三十三）

去年（一九九六年）の夏、娘がミラノへ転勤することが決まったと言い出したとき、そのことは漠然と頭には浮かんだが、一年後にそれが現実のものになると言う程の期待感は、正直言って持っていなかった。それもそうだろう。それは今から三十六年前の一九六一年の春、ペルー・ボリビアアンデス遠征隊の先遣隊員として、中村（保）君と一ケ月半近い船旅の後リマに到着して間もない頃の、遠い思い出の中で、細々と生き長らえていた人々との再会の夢なのだから。

遠征期間中毎日付けていた日記によると、リマに到着して間もない五月八日中村君と私はペルー山岳会主催の歓迎レセプションに招かれ、そこで記憶に残るイタリア山岳会トリノ支部の面々と初めて出会った。レセプションには日伊両国から各々もう一隊ずつ招かれていて、我々はペルー山岳会のメンバーの通訳を介して大いに語り合い〝愉快の一語に尽きる〟（日記から）一夕を過ごしている。当時我々が狙っていたプカイルカ中央峰は、コルディエラ　ブランカ山群に残された六〇〇〇米を越える唯一の未登峰と考えられており、トリノ隊も狙っていた。従ってレセプションでの出会いの時点では、彼等を先陣争いのライバルと考えていた。後になって彼等と写真を照合して検討した結果、我々が狙っていたのはプカイルカ北峰であり中央峰の北側に位置する別峰と判った。当時はこの周辺の資料も情報も極めて乏しく、隣接する山に登った米国の登山家クリンチ氏から入手していた情報の間違いから起こった混乱であった。

イタリア人達は英語もスペイン語もほとんど駄目だったが、話しかけるとニッコリ笑い、じっと聞き入り、一つ一つ大きくうなずく心優しき山男たちで、会う前に心の片隅にあった警戒心は瞬く間に雲散霧消し、心からの仲間になった。別々のルートから登り頂上で再会しようなどと話し合っている。(この時点では未だ同じ山に登ると考えていた。)翌日招かれてイタリア隊の宿舎を訪ね〝躍り上がらんばかりの歓迎〟を受けた。日記によると、その折日本土産として隊長にはしののめの風呂敷、隊員には日本手ぬぐいやこけし人形を贈っている。リマ市内見物にも一緒に出かけているから、イタリア野郎から見ても我々は結構楽しい相手だったのだろうか。今度入手した一九六一―一九六二年度トリノ支部報告書の中に、前述のレセプションで初めて会った日本人の印象を述べた箇所がある。〝日本人達はいつもにこにこしていて誠実で大変思いやりがある。彼らは山を神の創造物の最高傑作と思っている節がある。呆れて彼等を見つめたものだが、しかし実に親しみのもてる連中だった。〟とあり、極めて好感を持たれていたようである。

そうこうするうちに後続メンバーも到着し、吉沢隊長以下総勢七名のメンバーは五月二十四日リマを発ち、五月三十一日BC建設、六月十二日、十三日の両日に二パーティに分かれて全隊員が北峰に登頂した。そしてその後幾組かに分かれて周辺を偵察することになった。六月十五日倉知君と私の二人は、プカイルカ中央峰の南側を偵察する目的でC2を出発した。クレバスを避けつつ氷河を横切り一日が終りに近づい

た頃、突然目の前が開け大雪原が現れた。雪原は見事なアンデスヒダに刻まれたプカイルカ中央峰、南峰、それにタウリラフと幾つかの無名峰に囲まれた別天地である。日記の記述を拾ってみる。〝この広大な雪原の真ん中に荷を下ろ　ししばし景観に見とれる。この面からトリノ隊は中央峰をアタックしているのだ。アッタ！雪原の上に赤旗が点々と続いているのが双眼鏡ではっきり見える。頂上へ続く鋭い稜線から切れ落ちる氷と岩のバットレスが見る者を圧倒する。彼らはどこをルートに取ったのだろう。赤旗はバットレスの基部で消えている。雪原上にキャンプ跡のようなものも見える。撤収はごく最近だったに違いない〟。

翌朝、雪原上のシュプールを辿ってキャンプ跡に行き着く。そこで荷おろしのため登って来たトリノ隊のポーター達と偶然出会い、我々第二次登頂隊と同じ十三日に中央峰登頂に成功しメンバー全員が下のBCに揃っていると聞き、一気にBCへ駆け下り感激の再会を果たしている。日記によると〝食前酒にスパゲティ二皿とハム、コーヒー、フルーツポンチと大変豪華な昼食をご馳走になる。帰り際には予定外のビバーク用にと食料を呉れたこと。primo pane de bambino四個、salinaというソーダの素二箱、チーズ二種類計三個、フルーツポンチの缶詰二個、チョコレート四枚、チューブ入りミルク大一個、ネスカフェー一缶などなど、重いからと断っても駄目。隊長以下が思い付くままに取り出して持たせてくれた。〝感激の再会の場面で記述の大部分を食べ物のことにスペースを割いており、当時我々が持参した食料と比べトリノ隊の食料がいかに豪勢で我々を驚かせたかが窺える。

トリノ隊は氷河（雪原）のどんずまりにC2を建設し、それから登頂まで十二日を要し六月十三日の十四時四十五分に登頂に成功した由。我々第二次登頂隊が北峰の頂上に立ったのが同じ日の十三時二十五分であり十五時五十五分まで頂上付近に居たから、同日同時刻にこの広い地球上の全く異なる地点からやってきた二つのパーティが同じ標高の隣同志の頂きに居たことになる。リマで初めて会った時、頂上で再会しようと握手を交わした仲間が本当に同時刻に登頂していた偶然は、今考えても単なる偶然とは思えない何かを感じる。我々が頂上に着いた時、辺りは濃いガスに包まれ、北峰から中央峰に続く鋭い稜線の一部が見えただけであり、天気が好転しないため十五時下山開始。十五米程下降したところで微かに陽光が差し始めたのでその場に待機したところ、一気にガスが晴れ周囲の山々が全貌を現しており、あの時あと一瞬頂上を立ち去るのが遅かったら中央峰ピーク上のトリノ隊員を指呼の間に見つけ、エールを送りあえたのではないかと今でも惜しいことをしたと思っている。

時は経ち一九九七年七月。娘のミラノへの転勤という考えてもいなかった機会を利用してヨーロッパアルプスに登ってみようと考えた。たまたま本屋で見つけた「五十七歳の頂上―マッターホルンに魅せられて」という本を読み、ガイド同伴なら自分にも登れるかも知れぬと考え、同峰に登ったことのある前神君と藤本君に体験談を聞いたり、山渓が出版した「アルプス四〇〇〇米峰登山ガイド」を読み返し地図も買い込んで思案した末、イタリア側に一般ルートがあるグランドジョラスにしようと決めた。娘に探してもらいガイド組合がアルプス横断トンネルを挟んでシャモニーの反対側に位置するクールマヨールにあることが分かり、当方希望の日に英語の分かるガイドを予約する。

一方この機会にあのトリノ隊のメンバーと会えないだろうかと考え始め、これも娘に〝トリノ山岳会〟（正確にはイタリア山岳会トリノ支部）とcontactして当時の隊員を捜し出して貰うよう頼む。そもそも〝トリノ山岳会〟というものが今もあるかどうかも分からぬ状況であっ

たが、娘の職場にたまたま山好きのイタリア人同僚が居て手助けしてくれたお陰で山岳会と連絡が取れた。ここで私の日記帳が役立った。前述のリマでのレセプションで全員一緒の記念撮影が行われたが、この時の写真が手元にあることは分かっていた。だから写真のコピーをトリノ支部に送れば捜す手掛かりはあるわけだが、なにか他にも無いかと古ぼけた手帳を読み返してみたらアッタアッタ。その写真に写った人物の並び順に番号を振り、イタリア隊員全員のfull nameが残っていた。見た瞬間思い出したが、これは当時この仲間達と後々になって交流できるようにと、メンバーの一人に頼んで全員の名前を一字一字はっきり書いて貰ったもので、口に出して読んでみると懐かしい名前がじわーと思い出されてくる。小躍りして写真と手帳のコピーをミラノへfaxし、山岳会に流してもらう。ところがその後ミラノに滞在しクールマヨールに入った後も山岳会からは音沙汰がなく、やはり無理だったかと諦めかけた頃クールマヨールのホテルに十人のメンバーのうち六人の居所と電話番号が判ったとの知らせが入る。リストには一番会いたいと思っていたGarimoldi Giuseppeの名前があった。Ghigo Luciano, Miglio Jovanniも入っていた。今は高齢のはずの隊長の名前もある。胸がドキドキする。本当に彼等と会えるのだろうか。三十六年前の出会いを覚えていてくれるのだろうか。取るものも取り敢えずホテルの受付の電話機を使って隊長に電話を入れた。隊員はイタリア語しか喋れないと分かっていたが、もしかしたら隊長は英語を話したのではなかったかと期待してのことだが、期待は見事に裏切られた。スペイン語に切り替えてみても〝solo Italiano（イタリア語しか分からない）〟と繰り返すだけで話が通ぜず困り切っていたら、ホテルの女主人が電話のやりとりを聞いていたらしく、奥から出てきて通訳を引き受けてくれた。彼女が受話器を持ち、私は英語、隊長はイタリア語で話すのを通訳して貰いやっと会話ができた。隊長は八十一歳になるが元気な由（後日Giuseppeから隊長は病気と聞かされた）。我々のことは覚えていて絹のスカーフを貰ったこと（前述した通り、しののめの風呂敷を土産に上げた）、日本隊は強力で処女峰に登ったこと、封筒に入ったカードを添えて登頂祝いの花を貰ったこと（全く思い出せないが多分リマに戻ってから宿舎に送り届けたのだと思う）等を話してくれた。直接の話は何も出来なかったが、女主人によると泣き出しそうな話し方だったそうだ。私のことを隊長かと聞かれたので若者だったと伝えると共に、吉沢隊長は九十五歳でお元気だと伝えた。

一方アルプスに登る計画は、例年に無い悪天候に見舞われ、八日間山麓に滞在したが登る条件が揃ったのは僅か一日で、その肝心の日に腹をこわしホテルに迎えにきてくれたガイドにお帰り頂く体たらくで、やっと帰る前日グランドジョラスの登る時泊まるボカラッテ避難小屋まで往復したのがせめてもの慰めで、来年を期すことにした。

隊長以外の隊員とのcontactは娘が引き受けてくれ、最も会いたいと伝えておいたGarimoldi GiuseppeとGhigo Lucianoの二人がトリノで待っているとの嬉しいニュースが入ってきた。娘とGiuseppeはイタリア語を使っての会話だからいろいろ話ができたようで、電話で娘が私の名前を伝えたら〝丸山のことはよく覚えている〟と即座に答えたので、娘が驚いて〝え！覚えているのですか？〟と聞き返したら〝勿論さ〟と答えたとのこと。この話を娘から聞いただけで胸に熱いものがジーンと沸いてくる。あいつも覚えていてくれたのか。めちゃくちゃ嬉しい。居所が判って会ったとしても、私が持っているような感傷を彼等がこの小さな出会いに持っていなくても当然と言えるし、ましてや三十六年の歳月が経っているのだから、忘れてしまったと言われても文句はいえない話だ。実際別のメンバーの一人に電話したところ、全く覚えていないと言われた由で、それなのに彼は名前をちゃ

んと覚えていてくれた。唯ただ感動。三十六年前登頂後BCで再会したときの感激をまざまざと思い出す。当てのない尋ね人探しだったが報われたのだ。

七月二十一日、後からjoinした女房と娘と共に車でトリノに向う。約束の公園の中を手分けしてGiuseppeの姿を探す。若かしり頃の顔ははっきり覚えているが、果たして見分けが付くだろうか。不安と期待を抱きながら探し始めて数分後、落ち着いたグレイの背広を着た紳士が背をこちらに向けて人待ち気に立っている姿が目に入った。背格好は覚えているGiuseppeにぴったりであるが、顔が見えないので覗くようにしたら、その紳士も顔をこちらに向けたので顔と顔を面対させるようになった。白髪まじりの初老の顔に一瞬戸惑ったが、ニッコリ笑った顔を見てGiuseppe?と声を掛ける。抱えきれないほど分厚い胸板と大きな手の力強い握手に昔の感触がよみがえる。最初スペイン語で話し始めたのは覚えているが、後は何を何語で喋ったのか全く覚えていない。直ぐに娘が我々を見つけてくれ、二人は旧知の仲のように打ち解けてイタリア語で話し出した。昼食時だったので、彼が予約しておいてくれた馴染みのbar（軽食堂）の戸外テーブルに席をとる。食事を味わう余裕もなく娘の通訳であれこれ話が弾む。隊長以下メンバーの消息－Giuseppeは六十七歳になるが、山の事故で背中を痛め登山は止め、今はイタリア山岳会トリノ支部山岳博物館の図書館長をつとめている（半日勤務らしく名誉職と謙遜していた）。またLucianoも足の具合が悪くスキーはやるが登山はやっておらず、今も登っているのはGiovanni一人であると。隊長とFecchio Mildoは病気を患っている。遠征隊にジャーナリストとして参加していたRampini Arturo（前述の日本人についてのコメントを報告書に書いた隊員）は自殺し、doctorとして参加していたLuriaLucianoは病死した。中央峰には隊長とFecchio MildoそれにGhigo Lucianoの三人が登頂し、その他の隊員は周辺の幾つかの処女峰に登頂した。中村君と倉知君の二人のことを実に良く覚えているようで二人のfirst nameも飛び出した（トリノ隊は私も含めたこの三人だけが会っている）。グランドジョラスについて尋ねたら、日中は氷雪の崩落しやすい箇所があるから早発ちとスピード登攀が必要であるが、技術的には易しいと片付けられてしまった（その他幾つかの山についても尋ねてみたが全て易しいとの返事であり、彼等のレベル差が分からないから鵜呑みには出来ない）。娘と話している間、にこやかに笑いかけ、じっと聞き入り、優しく話しかけるGiuseppeの昔と変わらぬ話し振りに見とれながら、三十六年前にタイムスリップしたような夢見心地の時を過ごす。テーブルを囲んで記念撮影のあとLucianoが働く山岳博物館へ向かう。若い頃の面影を残したまま年輪を重ねたLucianoが自分のオフィスで嬉しそうに迎えてくれた。彼も図書関係の仕事をしており、山岳書が立ち並ぶ図書室に案内してくれた。世界中の山岳図書を置いているそうで、〝山岳〟や〝岳人〟その他の日本の山岳書も並んでいる。中村君が書いた〝ヒマラヤの東〟を贈る約束をする（帰国後中村君が直接送ってくれた）。Giuseppeから〝山岳〟に欠番があるので日本にあったら送ってほしいと依頼されたが、帰国後神田の悠久堂で一冊だけ見つけることができた。帰り際に私からいっか皆で集まろうともちかけたところ、Giuseppeが Midiならみんな行けるのではないかと提案してくれた。Aiguille du Midi（三八四〇米）はロープウェイ駅のすぐ近くにあり、雄大な展望を楽しめる大変人気のある山である。中村君にこの話をしたら彼も乗る気だったから、近いうちに是非実現したいと楽しみにしている。

こんな次第で三十六年目の再会はつつがなく現実のものとなり、登山を一緒にしたいという願いはもう叶わないかも知れないがあの頃から比べれば比較にならないほど世界は小さくなっており、その気になればいつでも互いに行きき

出来るし、美味しいワインにでも舌鼓を打ちながら昔話に花を咲かせることも簡単にできる時代になった。その意味で、放っておいたら永久につながらなかったかもしれない糸を結び付けることができた今回の旅は、意義深かったと喜んでいる。これが可能になったのは、イタリアに行って一年も経っていなかった娘が思いのほか流暢にイタリア語を話し、旧友たちの自由な会話を可能にしてくれたお陰であり、娘には大変感謝している。

登り残しの山

渡辺　嘉佑（昭三十五）

一度は登りたいと思いながらまだ登ってない山を登り残しの山と呼び会社に入ってからポツリポツリと登ってきた。

海外の山を別にすれば山岳部を卒業した時はそんなに残ってはいないと思っていたし気楽に山とスキーを続けている。

四日市工場に勤務時代に体調を崩し約二年のブランクのあとゲレンデスキーから、復活し冬はスキー、夏は山、その他はゴルフの生活である。

学生の頃からよく眺めた加賀の白山はまだ登っていない。どう言う訳か山岳部時代に登らなかった甲斐駒は一九九三年やっと頂上に立った。それまでは仙水峠から鳳凰三山への素通りばかり三度ほどあった。西穂高もまだ行ってない山である。

そんな中で連なっている山々をつなげると言う山登りを最近試みている。金峯山から雲取山までは一九九四年秋につながった。一泊二日か二泊三日で五回にわけて五月、九月に出来るだけテントを利用した。

中央アルプスの南の端に越百山と言う山がある。入社したのは大協石油だったが丸善石油との合併でコスモ石油になり社名と同じ山があるのに登らないのは山に登る人間として恥だとばかりさっそく出かけた。

木曽谷の大桑から伊奈川ダムまでタクシーで時間をかせぎ越百小屋まで全く平坦な場所がない尾根をひたすら登る。日暮れ前人工衛星がかなりの速さで飛んでいたのが印象的だった。

翌日は朝から雨模様越百山を過ぎる頃から風も加わり、仙涯嶺では前に進めずほうほうの態で小屋へ引き返す。一夜明けてもやはり雨諦めて下山した。

翌年一九九〇年夏、登りを楽にしようと千畳敷カールまでケーブルを使って高度を稼ぎ木曽駒から越百山までを縦走した。

宝剣嶽から空木嶽、南駒ケ嶽、越百山への稜

線は木曽駒周辺とは全く違い静かな山旅であった。

最近は西丹沢の大室山から塔ケ岳までをつなげようと西丹沢に入っている。桧洞丸と蛭ケ岳の間がまだつながっていない。西丹沢は登り下りが結構きつくてしっかりシゴかれている。

東北の山も故郷の福島の山以外はスキーで行った蔵王、八幡平、八甲田しか登っていない。あれこれ考えているうちに登り残しの山がどんどん増えてきて登り残しなどと言ってはいられなくなってきた。

登山案内書のコースタイムをどれだけ縮めるかと言う楽しみもあったが最近はコースタイムをクリアするのが苦しくなってきた。あわてずにゆっくり登ることが大切と自分にいい聞かせながら歩きたいと思う。

年をとると自分の実力から考えて登ってみたい山も変わってくるのだろうか。それにしても登り残しの山がどんどん増え続けている。精出して登らなければと思うこの頃である。

「ヤロー会」……八方尾根から唐松岳

小林　進　二（昭三十六）

「ヤロー会」の面々も卒業後三十数年を過ぎて人生の分岐点にさしかかり、定年を迎えて新しい進路の選択をしなければならない人もでてきたので、この辺りでまた何かヤローではないかと言う話が、いつぞやの銀座ライオンでの飲み会で持ち上がった。では早速具体案だが、次回は山の近くに奥さんも一緒に泊まって飲もう。一杯やるだけではもったいない、どこか登ろうではないか。ならば、大町の学者村に別荘があるからそこをベースに、難病で不自由をしている小林（正直）が行きたいと言っている立山にみんなで登ろう、てなことに落着して、昨年は（九六年）九月末の土曜日、大町中島荘に集合することとなった。参加者は家主の中島（寛）夫妻のほか、有賀、大賀、小林（正）、永井の各夫妻と山本（尚禎）、小林（進二）の計十二名。可先生と同病と聞く小林（正）が立川から大町まで自力でドライブしてきたとのことに、一同大いに感心、夜は信州の銘酒を片手に、ヨーデルを聞きながら「ほにほ缶詰」で知られる宝幸水産の中島の手配による本場のカニとマッタケをたら腹いただき、気持ちは昔に帰って深夜まで盛り上がったが、翌日曜日は台風の影響で明け方から雨風強く残念ながら山行は断念。さらばと大町にふさわしい美術館や山岳博物館を見学して教養を高め、常念そばで舌づつみを打って散会した。

さて今年（九七年）は大賀の采配で昨年と同じ時節の九月二十一日、大町中島荘集合となり、運んだのは有賀、大賀、中島の各夫妻と山本、小林（進）の八名。例によって中島手配のサンマ、ニシン、マッタケ、ソーセージなどなど食べきれないほど沢山の山海の珍味・旬のものをご馳走になって大満足、皆ごきげんとなる。翌二十二日、晴天ではないが一日持ちそうだ。ゴンドラやリフトが動いていることを電話で確認してから車で八方駅（ゴンドラの駅）へ向かう。白馬の土産もの売り場横で八方アルペンライン

往復のキップ（二、六〇〇円）を買い、ゴンドラとリフト二本を乗り継いで第一ケルンの一八五〇米地点到着。ここで体調不十分な大賀と夫人、有賀夫人と別れ、有賀、中島、山本、小林の四人で登り始めると、ノッケから有賀・中島は登山道をスタスタと行き、山本もそれに従い遠ざかる。小林は取り残されては大変と楽な遊歩道を必死に歩いてようやく合流できたが、後は途中、不帰を雲間にチラと見たくらいでわき目をする余裕もなく、この前このルートを登ったのは四十年前の五月だったなどと思い出しながら、先行する中島・有賀の姿と足元の石を交互に見て、ひたすら足を進めているうちに何とか唐松岳山頂に到着。記念写真のあと、あんぴん餅とお茶で一息ついて周囲の景色を見回したハズなのに、記憶に残っているのは五竜だけ、黒部を隔てて剣や立山、東の妙高あるいは浅間山はどうだったのか全く思い出せないていたらくである。ガスで見えなかったのであれば幸いである。ともあれ、山頂からは一気に第一ケルンまで下ったのだが、この下山で不覚にも日頃の運動不足を思い知らされることとなった。下りになると、有賀・中島はヒョイヒョイと気持ち良さそうにステップを踏んで走るように進んで行く。下りはそうするものかと真似をしてみると、これがなかなか具合よくスイスイと足が出るので、調子にのってついて行くと、いつの間にか使い慣れない足の筋肉が全てオーバーヒートしてしまい、自分の足なのに自分の足でないような、けいれんを起こして痛くてしょうがないのに足の動きを止めることもならず、重力に押されて転がるように下ってしまった。結果は左足膝の腱を損傷、二ケ月後も回復せず違和感を残す状態である。登山において、登りの時に片足にかかる加重は荷物を除けば、体重＋重力であるが、下りで走る場合その加重は（体重＋重力）×三と言われ、それだけの筋力を持つほどにトレーニングをしていなければならなかったのであった。行きはよいよい帰りはこわいの教訓は今日でも真実であった。

記録：唐松岳

一九九七年九月二十二日　晴のち曇り

八方尾根第一ケルン発	九時三〇分
肩の小屋通過	一一時五五分
唐松岳着	一二時一〇分
唐松岳発	一二時三〇分
第一ケルン着	一四時一〇分

追記：

(1) 唐松登山のあと、山足を少しづつでも鍛えんものと近場の山への山歩きを夫婦で試みているが、先日、群馬・長野県境にある湯の丸山（標高二〇九八米）に旧鹿沢スキー場から登り、尾根筋から山頂に出てアッと息をのんだ。冠雪したアルプスが北の乗鞍から南の乗鞍までなんと目の前に在るではないか。更に顔を南に向ければ御嶽山、駒ヶ岳（中央アルプス）、蓼科山も見えるし午前中は富士山まで見えたとのこと。この辺りは戦前からスキーツアーの名所で今日ほど道路網が整っていなかった昭和三十年代までは山スキーヤーの憧れの地であった。いずれ雪のある時に登ってみたい山である。

記録：湯の丸山・烏帽子岳

一九九七年十月十六日　晴

旧鹿沢第一リフト下発	一〇時一〇分
狐平（コンコンだいら）	一一時一〇分
南峰着	一二時一五分
昼食後北峰往復	
南峰発	一三時一五分
分岐点通過	一三時四〇分
烏帽子岳（二〇六六米）着	一四時二五分
烏帽子岳発	一四時三五分
分岐点	一五時〇〇分
地蔵峠	一五時四五分
リフト下着	一六時一五分

(2) ふるさと創生？資金や地方交付税が姿を変えた、村や町の新しい福祉施設として我が上州ではサウナ付き温泉風呂が続々と完成し、ほとんどが五〇〇円またはそれ以下で利用でき、特に山歩きのあとの汗流しにはお薦めの

場所となっています。上信越・両毛方面に出掛けの折はご連絡ください。ご案内いたします。

春の五竜岳

前神直樹（昭五十一）

今年（一九九七年）のゴールデンウィークの山行は混雑を避けて一週間早くやりませんかとの近藤君の誘いに乗って、四月十九日（土）早朝東京を出ることにする。当初栂池から三国境、雪倉岳、そこから蓮華温泉へのスキー滑降という案もあったが、土日の二日ではかなりきつそうで、しかも車を置く栂池に戻ってくるには蓮華温泉から再度天狗原まで登り返さねばならず、だったら遠見尾根から五竜岳往復でスキーでも楽しむかということになった。

四月十九日（土）晴

本来なら十八日（金）は会社を早々に出て私が近藤の自宅に直行、そのまま出発して登山口で仮眠、という手筈でゆく予定であったが物事はそう簡単には行かず、接待が入って近藤の自宅にタクシーで乗り付けたのは明け方の四時半であった。近藤も会社から帰ったのが十一時過ぎ、山の準備をして寝たのが一時になったとかで相当眠そうである。この日に備えて私の山の装備はスキー、私服も含めてすべて近藤の車に二週間も前から積み込んであり、早速服を着替えて出発。とは言え殆ど寝ていない私は車の後部座席で熟睡、簗場を過ぎるあたりまで約三時間全く気がつかず、その間近藤は必死で運転をしてくれていた。

九時過ぎ五竜遠見スキー場到着。エスカルプラザなる施設で朝食代わりにピザを食べて十時半スキー場駐車場を出発、ロープウェイを使って地蔵の頭直下には僅か七・八分で着いてしまった。大学一年の三月、神城の駅から歩き始めて地蔵の頭に着くまで気の遠くなるような長い急坂を重い荷物に喘ぎながら登ったことを考えると嘘のような手軽さである。雪は完全にザラメだがロープウェイを降りたところのスキー場は営業している。

十一時ゲレンデの中をシールを付けたスキーで登り始める。地蔵の頭の横を通過して小遠見山に続く尾根を黙々と登る。天気はほぼ快晴、

日差しが相当きつくほっておけば真っ黒に日焼けするどころか、火傷になりかねない。休憩する度に日焼け止めクリームを塗りまくる。

十三時小遠見山の北西斜面を抜けて中遠見との鞍部に出る。予想通り鹿島槍ケ岳の北壁が圧倒的な存在感で岐立している。しかしこの北壁をこうやって目前にするのは一体何年振りのことだろう。山岳雑誌のグラビアとかでずいぶん目にしているが故に見慣れた風景と勘違いしそうだが、よく考えてみれば最後に遠見尾根にきたのはもう十五年も前のことで、そう何回も実際の鹿島北壁を前にしてはいないのだと思い出す。

中遠見の登りで一旦スキーをはずすが踏み跡もあるのでそう苦労はしない。大遠見あたりで再度スキーをつけてここからは単調にスキーを滑らすだけで距離は稼げる。五竜も大きな山容を見せてきたが、しかしいかにも山頂は高く、距離は長い。予定では白岳の斜面を今日の内に登り切って五竜の小屋に入っておこうというものだったが、そこまで今日の内に届くのか、自信が持てなくなるほど残った行程が長い。十五時頃こんなに遠見尾根というのは長大な尾根だったかなと思う頃西遠見を通過、後は白岳の登りを残すところで踏み跡は尾根から外れて、五竜東面に向かっている。白岳に登る斜面にはかすかにトレースはあるもののこの腐った雪ではラッセルは必至である。頑張れば五竜の小屋に入れるが、このままであれば着くのは恐らく七時を過ぎる。どうせラッセルをやるのであれば早朝の締まった雪でやろうということになり、この日は白岳手前の鞍部を幕営地とする。

スコップがないのでブロックができず、風を受けないようにするには苦労する。スキーを支柱にしてツェルトを張るが、風にはためいてなかなか張りずらい。天気はあくまで晴、五竜の山頂に時折雪煙が上がっているのが見えるが夜中中風が強いと寝るのは大変だなあと思いながら、張り終えたツェルトに入り込む。食事の用意もそっちのけで、重い目をして上げてきたアルコールをまず一杯、そうこうする内ピタっと風が止む。

結局この日一日天気は崩れず、夜になって満天の星、しかも全く風が出ない。何回か山登りをしていればこんな天気に恵まれることもあるんだなーと妙な感心をして眠る。

四月二十日（日）晴

すでに四月はといえ快晴となると夜明け前の冷え込みは厳しい。三時過ぎ頃から寒さに体中の震えがたまらなくなって目が覚める。前の晩は結構遅くまで起きていたせいか、寒さで寝れないといっても体が活動ＯＫと言っているわけでもなく、周りが明るくなって多少気温が上がってくるのに合わせてうたた寝してしまう。

朝食も多少のんびりとなってしまい、ツェルトも一応撤収して出発は八時。快晴の空の下、早々とき つくなる日差しの中で黙々と白岳の斜面にステップを刻む。やはり気温が上がっていないせいか、高度は確実に稼げる。昨日であれば夕刻の腐った雪で、しかもすでに体力を消耗していたのだからとてもこう確実にはいかなかったのではないだろうか。一時間程で白岳到着、待望の剣に続き北方稜線の山々が黒部川の向こうに見える。すべては白い世界だが日差しの強さといい、完全に春山である。五竜小屋はすでに登山者が二人休んでいて、五竜の山頂からはもう二人下りてくるのが見える。

九時四十分五竜小屋出発、頂上は近くに見えるがそれが案外と時間がかかる。稜線上の雪は風で吹き飛ばされているところも多いが雪の溜まったところは腐っていて歩き難いしトラバースで進むところは神経を使う。ザイルを使うのは大袈裟だが昔そんなことを考えもしなかったと思うとバランスが悪くなったなあと痛感する。

十時四十分頂上着。三六〇度の大パノラマ。これだけ天気に恵まれた頂上などそう何回も経験していない。鹿島槍は相変わらず立派だが、八つ峰を従えた剣の姿には感慨深い。もう何年も前に八ツ峰雪稜を攀じり、またその数年前に僧ケ岳に始まる北方稜線を剣まで辿ったのも同じ四・五月のことだった。

近藤と互いに写真を撮り合うと下山開始。案の上アイゼンは雪でダンゴになりこれを落とすため幾度となくピッケルを振らなくてはならない。もうはるか二十年以上前に同じ四月、前穂北尾根の下りでダンゴになった雪で滑落、しこたま肋骨を打ったことを思い出して余計ダンゴ落としに神経を使う。順調に下りてゆく近藤を追いかけて十一時過ぎ五竜小屋到着。近藤はここまで重い目をして担ぎ上げたスキーを装着、私は白岳を経由して忠実に尾根を戻るつもりだったが、白岳までまた登り返すのに嫌気が差してええい、ままよとばかり白岳斜面に飛び込みそのまま天幕地までトラバースで下る。

近藤は後から華麗なターンで人っ子一人いない広大な斜面を滑る、絵になる光景だ。

天幕地で寛ぐと撤収、後は荷物を担いで下のスキー場目指す。西遠見から大遠見、中遠見の登りにかかる手前まではこれ以上快適な下山はあるのかというくらいなだらかな緩斜面が続く。ただスキー板に乗っているだけで体は勝手に下りてゆく。登りに見せていたと同じ鹿島北壁が中遠見の陰に隠れて、八方尾根側を巻気味に進むといつしか小遠見の下も通過してはるか下にスキー場が見えてくる。近藤はあくまでスキーを放そうとはせず、灌木の斜面を縫うように滑っていく。中遠見の登り斜面で一旦スキーを外した私も、スキー場の手前で再度装着、近藤と一般スキー客の中に紛れ込むとあっという間にゴンドラ駅に着いてしまった。西遠見まで登りは五時間であったが、下りは二時間ちょっとであった。

たった一泊二日の登山ではあったが予想外に長かった遠見尾根を登って久しぶりに雪の後立山の一峰に立てたことに満足感を覚えた。（所詮は自己満足だが）

山小屋に集いて

一橋大学一橋山岳部リーダー　宗像　充

僕がこの山小屋の一員となり、はや三年目の春を迎えようとしている。部員不足の中、窮余の策として計画した駒沢大学との合同合宿も、好天に恵まれ、蝶ガ岳から霞沢岳まで無事に歩きとおすことができ、ひとまず、九七年の山行の日と区切りをつけることができた。大学山岳部ではお決まりの部員不足は今年も好調に持続している。現在部員はリーダーの僕と、昨年リーダーの西井、今年度復部した大谷、それに司法試験のために休部した立木である。冬合宿以降、四年の大谷は合宿から引退するため、今年から実働は僕だけであり、春は千葉大学と合同で合宿をおこなうつもりである。とはいえ、他大学の人間と多く山にいく機会をもて、僕個人としては充実した活動をおこなっているとおもっている。

こういう状況に手をこまねいていたわけではないが、知ってのとおり、大学山岳部を取り巻く状況は非常に厳しいものがあり、多くの大学で部員は片手の指で数えられるほどしかいないのが実情である。とはいえ、このような状況を甘んじて受け入れられるほど、往生際がよくないし、ただ、昔を懐かしんで今の状況にため息をついても始まらない。まだ、山に登りたいという人間がいることを信じ、取り留めもなく、私見を述べてみたい。

まず、いつの時代も議論されてきたであろう、山岳部の存在意義について考えてみたい。現在、山岳部はこれといった目的を持って存在しているのではない。組織として義務づけられていることは少なく、これまでそうしてきたという理由で、山行がこなされることがままある。とはいえ、自分がやりたいことがあれば、即実行に移すことができる。その点でこの部は現在のところ限りなく自由であるといえる。自由といえば現在この部は体育会ではない。数年前の事故以来、大学との責任問題が議論になり、そういうことから自由に山に登るために、体育会を脱退したと聞いている。（不正確かもしれない）アルピニズムや先鋭登山の議論とは無関係の展開であったと認識している。つまるところ、山岳部の存在意義など、その時々の部員が決めてきたことであり、それはずっと変わらなかったのではないか。一つあるとすれば、山に登りたい人間がそのために集い、そして作り上げ、積み上げてきた組織なのではないか。僕自身は、この部は部員が自分のやりたい山登りを見つけ、それを実現するために、最大限のサポートをしてくれるものであって欲しいとおもっている。部員全員が一つの目標に進むことができれば一番よいのは当然である。それ以前に部員が集まらないのは、ひとえに自分の力不足だとおもっている。

ところがこに一つ問題が生じる。いまいったような機能を果たすためには、山岳部は組織としてそれが培った技術と経験を部員に提供できるものでなければならない。しかし、現在のように小人数の部員では、その基本的な技術の伝承もままならない。たとえ、人数がそろっていても、自分自身の山登りをどうしたらいいのかわからなければ、その伝えるべき技術をも伝えることができないであろう。

この点でも、この山岳部は自由である。他大学であれば、監督やコーチがいて、一定の部員の力不足は、OBの監督の行き届いたシステム

によって補われる。しかし、この部では、すべての部の運営は部員の自主性に任されているため、一定の積み重ねはあるものの、基本的な技術の伝承が何であるかの判断も流動的であり、部員が極端にすくなくなったり、上級生の力が劣ればその影響はもろにあらわれる。実際、僕自身も、少ないながら身につけた岩登りの経験は、部以外のところでつんできたものが多い。

このこと自体は一概に非難されるべきことではない。部員同志にやる気がありさえすれば、思考錯誤しつつも、それが結果となってあらわれるので、それなりの充実感を得ることができる。僕自身も、剣や谷川で岩登りの洗礼を受ける他大学の部員をうらやましくおもったこともあったが、いろいろと試しながら身につけてきたその過程を振り返ったときそれはそれでおもしろかったとおもっている。しかし、何をしても許されているということは、なにをしたらいいかわからない部員にとってはいらいらである。大学で山をやりたいという人間は、何も全員がヒマラヤやビッグウォールを目指しているのではなく、充実した大学生活を送るために山岳部へと足を運ぶ人も多いはずである。そんなとき、部内が決められた合宿を決まっているからこなしているだけだ、といった状態であれば、そういう人が山岳部に魅力を感じることが果たしてあるだろうか。そういったとき、こういう人に山に興味を抱いてくれるような契機を持ってもらうことができなければ、もはや山岳部は伝統という名の束縛でしかない。要するに受け皿としての形態が整っていないのである。この事は、事故にも間接的な影響を及す。残念ながら僕自身も、三つ峠での転落事故を防ぐことができなかった点で、自分の経験不足を痛感させられた。

以上のようなことを考えたとき、一橋山岳部の現役とOBの関係は少々寂しいものがある。いますぐ、監督やコーチをつけてほしいといっているのではない。部員が減るに任せて部をどうすることもできなかった我々の姿勢も反省すべき点はいくらでもある。大事なのはいっしょに山に登る仲間を互いに得ようとすることなのではないだろうか。昔の部の状態を懐かしみ、今の部の状態を嘆くだけでは現役は聞く耳を持たないだろうし、山岳部をよくする何の手助けにもならない。

一橋山岳会というものがある。一橋山岳部とそのOB組織である針葉樹会をあわせてこういうらしい。「らしい」というのも、この会には実態らしいものがないからである。第一、現役部員は、この会に所属しているという意識がまるでない。この組織を山岳会としての実態を備えたものにして欲しいというのではない。そうではなく、現役とOBとの関係を深める枠組みとならないのであろうか。現在、現役とOBが山にいく機会は、若手OBとのあいだで、ごくたまにあるだけである。確かに、年配のOBのかたには、自分がやっている山登りが若い現役とはあわないのではないかという遠慮があるかもしれないし、現役には自分達でやれる限りは、自分達で勝手に登りたいというわがままがある。しかし、たとえば、年配のOBのかたであれ、活発に山行を行っているOBであれ、新人部員と山に行けば、いっしょに話をしていただけるだけでも、新人に山への興味を与えることができるだろうし、新人にとっては、山のいろはを知るよい機会になる。また上級生部員にとっても、自らの技術と経験を積むためにOBと山に行くのはよい機会である。また、針葉樹会としても、今の山岳部をどうしていきたいのか、率直な意見と要望を現役にぶつけて欲しい。それを聞いて判断するのは現役であるにせよ、現在の部の状態を客観的にみ、部を向上させていく上で何等かの助言となるのはまちがいない。いまいったようなことを現役とOBとのあいだで取り決め、年間行事として定着させてもいいし、定期的に山にいく機会を持ってもいい。そういったことを少しずつ積んでいけば、山岳部としての実態を備えた、少なくとも年代に関係なくいっしょに山にいく仲間が大勢いる一橋山岳会ができていくのではないだろうか。それが将来、山

をやりたいという人間に開かれた魅力ある組織になり得れば、一橋山岳会、山岳部とも、それ自身を活性化しつづけることができるのではなかろうか。いずれは、海外登山や先鋭的なクライミングが日常的におこなわれることにもなるだろう。もちろん、いっしょに山にいく仲間が多ければ、その様なことにこだわる必要もないとおもう。簡単なことではないが、それが山岳部を活性化させる一助になるのではないかとおもっている。

一九九八年、僕自身は昨年身につけた成果を思いっきり山にぶつけてみたいとおもっている。それとともに山に対して謙虚ではあるが着実に取組む姿勢を新たに入るであろう一年生に伝え、自分自身も学んでいきたいとおもっている。

山々が赤く色付くころには、大勢の新しい一年生と、OBと新しい山小屋に集い、語り、飲み、そして山に登りたいとおもう。

会務報告

一、平成八年度活動報告

(1) 懇親山行

平成八年九月二一、二日（一泊二日）

雨飾山

台風の接近にもかかわらず予想外に天気がもった。眺望は楽しめなかったが登頂できた。参加者四名

(2) 会合

(a) 幹事会　平成八年六月一一日

(b) 評議会　平成八年六月一八日

(c) 総会　平成八年六月二五日

(d) 新年会　平成八年一月二九日

(3) 出版物

(a) 針葉樹会報第八三号　平成八年一一月発行

(b) 一九九七年度会員名簿　平成九年六月二五日発行

二、平成九年度役員（新旧役員対照表）

(1) 会長、副会長

会長　石原　脩（留任）

副会長　高崎　治郎（留任）

(2) 評議員　卒業年度

松下　順吉　S19（留任）

小林茂雄（議長）S19（留任）

樋口　洪　S22（留任）

田中　一雄　S23（留任）

石井左右平　S23（留任）

山本健一郎　S32（留任）

中村　保　S33（留任）

中島　寛　S36（留任）

高橋　信成　S38（新任）↑倉知　敬

小野　肇　S40（新任）↑上原利夫

中村　雅明　S43（留任）

井草　長雄　S48（留任）

藤本　敏行　S51（留任）

中西　茂　S55（新任）↑引地　真

白石　章治　S61（留任）

幹事

代表幹事　西牟田伸一（留任）

総務幹事　古田　茂（留任）

会計幹事　渕沢　貴子（留任）

会報幹事　田形　祐樹（留任）

中村　保（留任）

井草　長雄（留任）

稲毛　尚之（留任）

山行幹事　近藤　泰（留任）

古瀬　泰介（留任）

学生幹事　古瀬　泰介（留任）

渕沢　貴子（留任）

保険幹事　岡部　晃和（留任）

(4) 監　事
渡辺　嘉佑（新任）↑山本健一郎
中村　雅明（留任）
(5) 新入会員　なし

三、一般会計平成八年度決算（別紙のとおり）
四、遭難対策基金平成八年度決算
（別紙のとおり）
五、一般会計平成九年度予算（別紙のとおり）
六、遭難対策基金平成八年度予算
（別紙のとおり）
七、平成九年度　活動予定（兼活動報告）
(1) 懇親山行
平成九年九月二〇、二一日（一泊二日）
高妻・戸隠周辺（参加者約一〇名）
(2) 会　合
(a) 幹　事　会　平成九年　六月一一日
(b) 評　議　会　平成九年　六月一八日
(c) 総　　会　平成九年　六月二五日
(d) 臨時評議員会　平成九年一二月一九日
(e) 新　年　会　平成一〇年一月二三日
(f) 幹　事　会　平成一〇年五月下旬予定
(3) 出版物
会報　第八四号　平成九年九月発行
第八五号　本号

（別紙１）

一般会計平成８年度決算（案）

（平成８年６月１日～平成９年５月31日）　（金額単位：円）

支出			収入		
項目	金額	（予算額）	項目	金額	（予算額）
会報発行費	272,538	400,000	納入会費	620,588	700,000
名簿発刊費	84,000	150,000	雑収入	8,846	500
通信連絡費	100,880	60,000	前年度繰越	120,493	120,493
総務諸雑費	54,042	60,000			
学生保険補助	30,000	40,000			
山岳部補助	100,000	100,000			
次年度繰越	108,468	10,993			
合計	749,928	820,993	合計	749,928	820,993

遭難対策基金平成８年度決算（案）

（平成８年６月１日～平成９年５月31日）　（金額単位：円）

支出			収入		
項目	金額	（予算額）	項目	金額	（予算額）
学生保険補助	30,000	40,000	前年度基金有高	5,009,250	5,275,007
遠征特別基金残高	1,000,000	——	利息等	32,335	35,000
当年度基金残高	5,345,261	6,381,683	学生保険補助	30,000	40,000
			カカボラジ剰余金より	1,071,676	1,071,676
			カカボラジ寄付金より	232,000	——
合計	6,375,261	6,421,683	合計	6,375,261	6,421,683

＊平成８年度末　ワリシン（満額ベース）¥56,270,000
　　ワリシン専用普通預金　¥　105,261
＊カカボラジ剰余金を遠征特別基金へ振り替えた。

一般会計平成９年度予算（案）

（別紙２）

（平成９年６月１日～平成10年５月31日）　（金額単位：円）

支出		収入	
項目	金額	項目	金額
会報発行費	400,000	納入会費	700,000
通信連絡費	80,000	雑収入	2,000
総務諸雑費	60,000	前年度繰越	108,468
学生保険補助	40,000		
山岳部補助	140,000		
次年度繰越	90,468		
合計	810,468	合計	810,468

遭難対策基金平成９年度予算（案）

（平成９年６月１日～平成10年５月31日）　（金額単位：円）

支出		収入	
項目	金額	項目	金額
学生保険補助	40,000	遭対普通基金有高	5,345,261
遭対普通基金有高	5,380,261	遠征特別基金有高	1,000,000
遠征特別基金残高	1,000,000	利息等	35,000
		学生保険補助	40,000
合計	6,420,261	合計	6,420,261

編集後記

吉沢一郎さんが亡くなられて早２ケ月が過ぎました。

私自身も山登りに大きな興味を持ったきっかけの一つが、吉沢さんが総隊長を務められたＫ２峰の遠征のドキュメンタリー番組を高校生の時に見たことであり、その後同じクラブに所属でき、初めて部室でお会いしたときには何かとても嬉しかったことが今でも思い出の中にあります。

改めてご冥福をお祈りいたします。

会員各位殿

次号で故吉沢一郎さんの追悼を特集いたします。
大先輩の思い出・エピソードをご投稿下さいますようお願いいたします。
締め切りは６月末日です。

最近、勤務先或いは自宅で電子メールのアドレスをお持ちの方が増えてきております。

最新（1998年２月末日現在）の針葉樹会関係者の電子メールアドレスを掲載いたしますのでご参照下さい。

なお、田形君（平成６年卒）が電子メールアドレスリストを管理しておりますので、このリスト以外で電子メールアドレスをお持ちの方は、是非田形君まで電子メールでご連絡をして下さい。宜しくお願いいたします。

S33　上原利夫　uehara@mud. biglobe. ne. jp（自宅）
S33　丸山則二　maruyama@ya2. so-net. or. jp（自宅）
S33　塩川清彦　JSPKG003@ppp. star-net. or. jp（職場）
S36　中島　寛　QWMO2144@niftyserve. or. jp（自宅）
S39　村上泰介　tm@urban. or. jp（自宅）
S51　前神直樹　maegami. naoki@nisshoiwai. co. jp（職場）
S53　佐藤活朗　i-sato@oecf. go. jp（職場、在パキスタン、日本語可）
S53　近藤　泰(山行幹事)　obyknd@aol. com（自宅）
　　EZL04760@niftyserve. or. jp（自宅）
S54　佐藤周一　syu-sato@mxv. meshnet. or. jp（職場）
S54　神野　隆　t. j. kono@jsn. justnet. or. jp（家族共用）
S55　引地　真　hikichi@nedvc. co. jp（職場）
　　hikichi@ppp01. infopepper. or. jp（職場）
S55　米田篤裕　amaita@japanexim. go. jp（職場）
　　CYY00214@niftyserve. or. jp（自宅）
S59　稲毛尚之(会報幹事)　inamo-n@mitsubishi-logistics. co. jp（職場）
S62　山内・川名真理　yamauchi@sas. upenn. edu（自宅、在米、日本語可）
S63　斉藤　誠　makoto@mmc-aizu. pref. fukushima. jp（職場）
H１　井上裕之　CXL01553@niftyserve. or. jp（自宅）
H５　天羽康之　yamo@tkacu21. xm. mitsui. co. jp（職場）
H６　寺島　修　K448901@kepco. co. jp（職場）
　　BQA00175@niftyserve. or. jp（自宅）
H６　田形祐樹(会計幹事)　tagata@jil. go. jp（職場）
H７　古田　茂(総務幹事)　CZR10156@niftyserve. or. jp（自宅）
H８　古瀬泰介(山行幹事)　thuruse@jp. oracle. com（職場）
H８　淵沢貴子(総務幹事)　gsm9606@srv. cc. hit-u. ac. jp（学校、98年３月大学院卒予定）
３年　宗像　充(現役リーダー)　st55239@srv. cc. hit-u. ac. jp（学校）
３年　西井　薫(現役)　st41192@srv. cc. hit-u. ac. jp（学校）

(注) かっこ内はメールをチェックしているパソコンがあるところ。
メールのチェックの頻度は人により大いに差があるので注意。

日本労働研究機構国際部計画調査課　田形祐樹(たがたゆうき)
郵便番号163－0926 東京都新宿区西新宿２－３－１ 新宿モノリスビル
電話03－5321－3084　ファックス03－5321－3125
電子メールtagata@jil. go. jp
NOQM-0 〈^ http : //www. mol. go. jp/jil

発行日　1998年4月20日 発行所　針葉樹会 印刷所　篠田印刷	針葉樹会報 第85号	編集人 〒121-0815 東京都足立区島根2-32-19-405 稲毛　尚之